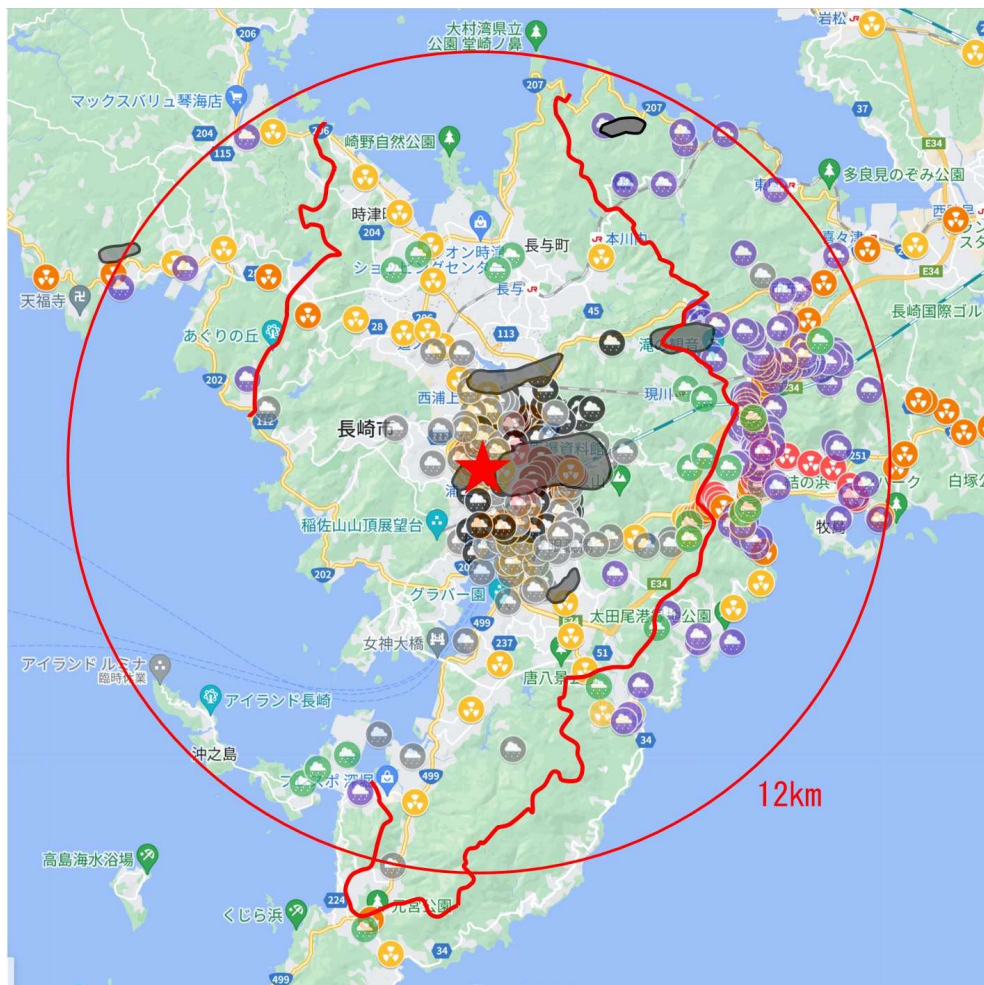


# 長崎原爆の「黒い雨」



長崎県保険医協会

会長 本田 孝也

# 長崎原爆の「黒い雨」

令和7年1月30日

本田内科医院

本田 孝也

## 第1章 総論

広島「黒い雨訴訟」に対する広島高裁の判決を受けて令和4年指針が策定され、令和4年4月より広島黒い雨地域住民に対して被爆者健康手帳の交付が始まった。しかし、長崎は救済の対象外とされた。長崎を対象外とする理由として国は「原爆投下後、爆心地の周辺地域のうち、西山地区以外で降雨があったとの客観的な記録はないとした福岡高裁平成30年判決が、令和元年11月21日に最高裁の上告棄却・上告不受理決定により確定している」ことを繰り返した。しかし、「西山地区以外で降雨があったとの客観的な記録はない」のは長崎原爆戦災誌が刊行された昭和60年時点の国の主張である。本意見書では昭和60年以降に行われた、あるいは発見された調査結果をもとに、長崎においても原爆投下後広い範囲で雨が降ったという客観的事実を時系列で立証する。

## 長崎測候所の記録

長崎測候所の記録によれば原爆が投下された日の天候は晴れ又は曇り、「雨は観測されなかった」とされている(図1)。この記録は長崎測候所では雨が観測されなかったことを示しているだけで、長崎の12km圏内全域で雨が降らなかったことを調査した結果ではない。原爆投下の大混乱の中で雨の調査などできる余裕はなかったろうし、また調査した形跡はない。長崎測候所では雨が観測されなかったからといって雨が降らなかったことにはならない。長崎原爆の黒い雨は西山地区や間の瀬地区などを除けば広島と異なり雨量は小雨であり、降雨時間も短いにわか雨だった。詳細についてはこれから順次述べる。



図1 長崎測候所の記録

### 原子爆弾災害調査報告集

昭和28年の原子爆弾災害調査報告集の雨に関する記述は曖昧である。「雨の降った地域は爆心地の SSE（南南東）4.2km 以北浦上川下流と道の崖とを結ぶ線以东であろう。」の根拠は示されず範囲もはっきりしない（図2）。



図2 原子爆弾災害調査報告集

「長崎市の東部より南々東部にかけて黒い雨が降った所があるが、」はおそらく西山地区を指していると推測される。むしろこれに続く「これは焼けた灰が混じったため、なおその他に衣類に穴をあけるような有害物質を含んでいた」との記述が興味深い。

## 長崎原爆戦災誌

昭和 52 年「長崎原爆戦災誌第 1 巻総説編」に「長崎の黒い雨については学術的記録は少なく、わずかに、残留放射能で知られる西山町四丁目の雨がある」と記載されているように、昭和 52 年までに長崎原爆の雨に関する学術的調査は行われていない。実際は昭和 25 年に ABCC による MSQ 調査票による調査が行われたが結果はこの時点では公表されていない。長崎原爆戦災誌の雨に関する記述は田栗奎作氏による聞き取り調査をもとに作成された。「手記や証言によると、医大付属病院裏の丘陵、本原町、穴弘法、金比羅山、西山町四丁目付近にかけての地域が多い。その他西部では瓊浦中学校付近、北部では住吉トンネル工場付近、川平地区等で降雨を見ており、また、南東部では寺町付近でも極少量の降雨があったと記載されている」（図 3）。

長崎原爆の雨に関する初めての系統的記録と言える。田栗氏は被爆未指定地域の古賀村の上床や田結村の開でも聞き取りを行い雨に関する証言はなかったとしているが、雨を記憶している人が聞き取りをした人の中に含まれなかったため、これをもって雨が降らなかったと結論することはできない。

長崎原爆戦災誌第 3 巻（昭和 60 年 3 月発行）の東長崎地区における降雨の記載はないことを「降雨があったとされているのは旧長崎市内に限られること」の理由としているが、長崎原爆戦災誌には様々な原爆の被害が記載されており雨にまで言及されなかったに過ぎない。その証拠にまとまった黒い雨がふった「5. 西山各地（2.6～2.8 キロ前後）」（101～107 ページ）においても雨に関する記載はない。最後に「なお、西山町 4 丁目付近は、当日の西風と降雨によって土壌から放射性物質が、現在も微量ながら検出されており学術的な調査地域となっている。」と補足されているだけである。黒い雨で有名な西山地区ですら雨に関する記載がないのであるから、東長崎地区で雨

に関する記載がないから雨が降らなかったとはならない。

ただ、この時点、すなわち昭和 60 年の時点で「被爆未指定地域で雨が降ったという客観的記録はない」と主張しているに過ぎない。

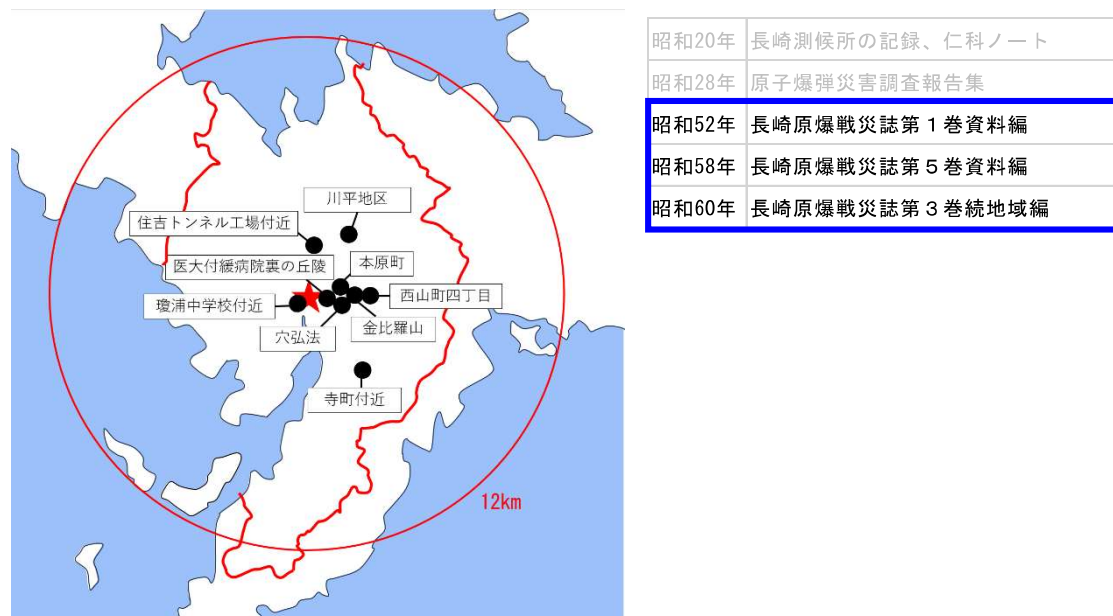


図3 長崎原爆戦災誌

### 長崎原爆地域図

「被爆未指定地域で雨が降ったという客観的記録」あるいは「被爆未指定地域で雨が降ったという客観的証拠」が現れるのは昭和 60 年以降である。

長崎原爆地域図は現在の長崎原爆地域図の原型であり、昭和 60 年以降に作成された (図 4)。

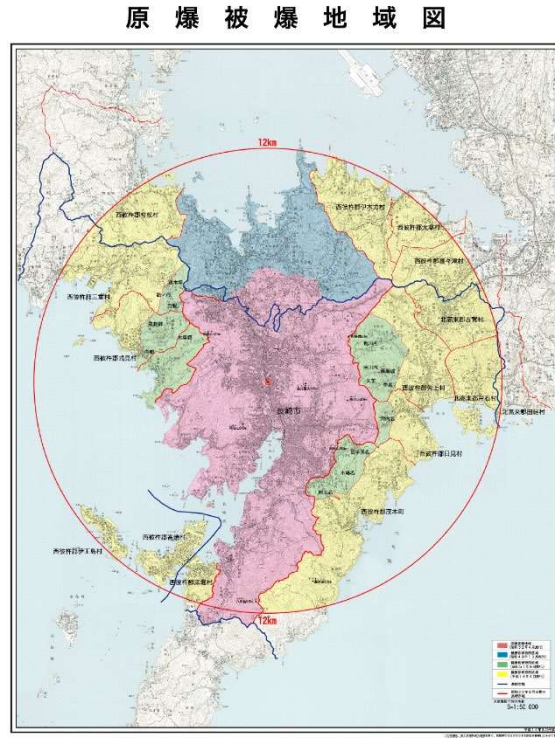
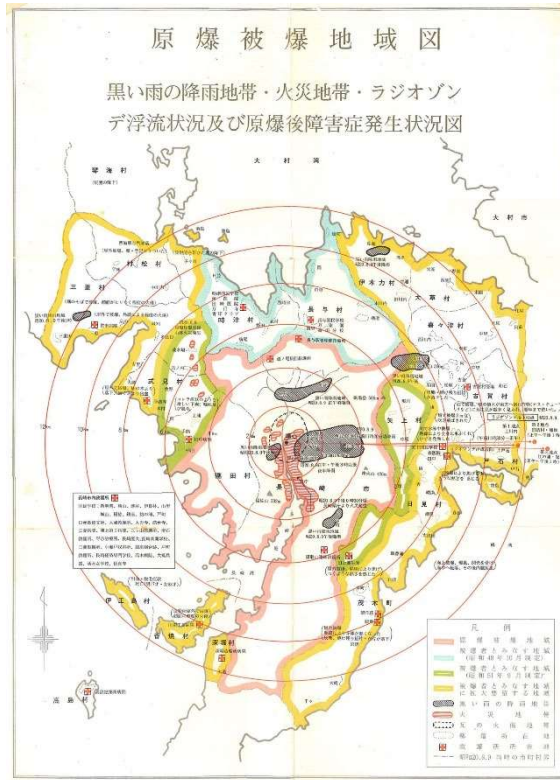
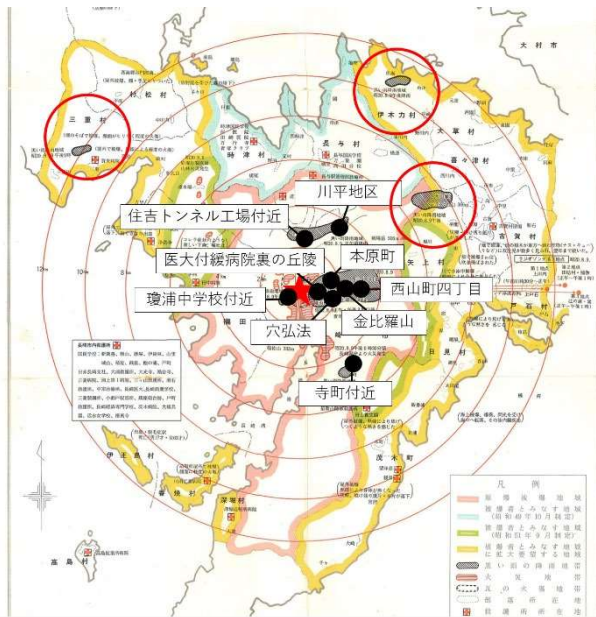


図4 左：原爆被爆地域図（初版） 右：現在の原爆被爆地域図

原爆被爆地域図には「黒い雨の降雨地帯・火災地帯・ラジオゾンデ浮流状況及び原爆後障害症発生状況図」と副題がついている。黒い雨の降雨地帯を意識して作成されたことは明らかであり降雨地点ではなく雨の降った範囲が図示され、その中には田栗奎作氏による「医大付属病院裏の丘陵、本原町、穴弘法、金比羅山、西山町四丁目、瓊浦中学校付近、住吉トンネル工場付近、川平地区、寺町付近」を含んでいることから長崎原爆戦災誌を参考にして作成されている。注目すべきは長崎原爆戦災誌には記載されていなかった東長崎の間の瀬地区、伊木力村、三重村に雨の範囲の記述があることである（図5）。

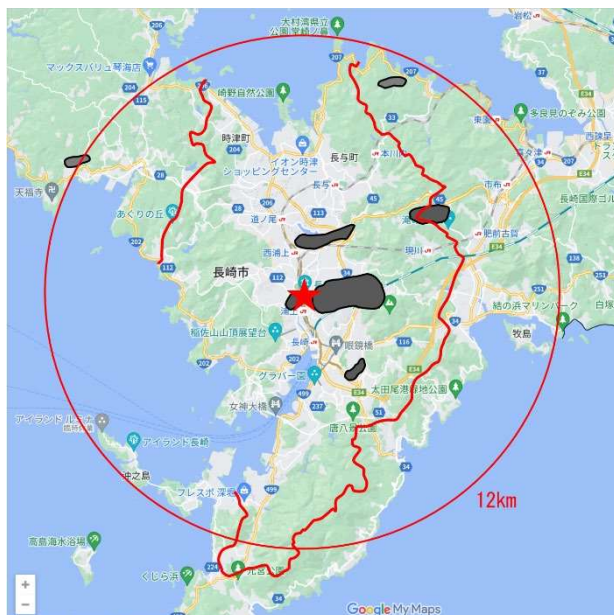


昭和20年	長崎測候所の記録、仁科ノート
昭和28年	原子爆弾災害調査報告集
昭和52年	長崎原爆戦災誌第1巻資料編
昭和58年	長崎原爆戦災誌第5巻資料編
昭和60年	長崎原爆戦災誌第3巻続地域編
昭和61年	原爆被爆地域図(初版)

図5 長崎原爆戦災誌の雨地点と原爆被爆地域図(初版)の黒い雨の降雨地帯

原爆被爆地域図は長崎県市によって作成された公式な記録である。間の瀬地区に降雨の記載はあるが、昭和62年に新聞報道された東長崎の黒い雨に関する調査の結果が反映されていないことから昭和61年頃、あるいはそれ以降に作成されたものと推測される。

原爆被爆地域図の降雨範囲をGoogle Mapに重ねると図6のようになる。



昭和20年	長崎測候所の記録、仁科ノート
昭和28年	原子爆弾災害調査報告集
昭和52年	長崎原爆戦災誌第1巻資料編
昭和58年	長崎原爆戦災誌第5巻資料編
昭和60年	長崎原爆戦災誌第3巻続地域編
昭和61年	原爆被爆地域図(初版)

図6 原爆被爆地域図の黒い雨の降雨地帯(Google マップに転記)

この時点で被爆未指定地域の3ヶ所で降雨が確認されたに過ぎない。その後昭和62年に黒い雨の降った間の瀬地区住民の聞き取り調査、東長崎の黒い雨に関する調査、平成11年に原子爆弾未指定地域証言調査、面接調査、平成23年に長崎県保険医協会による間の瀬住民に対する聞き取り調査が行われ、被爆未指定地域に降った雨に関する情報が収集されたが、これについては後述する。

### ABCCのMSQ調査による雨地点

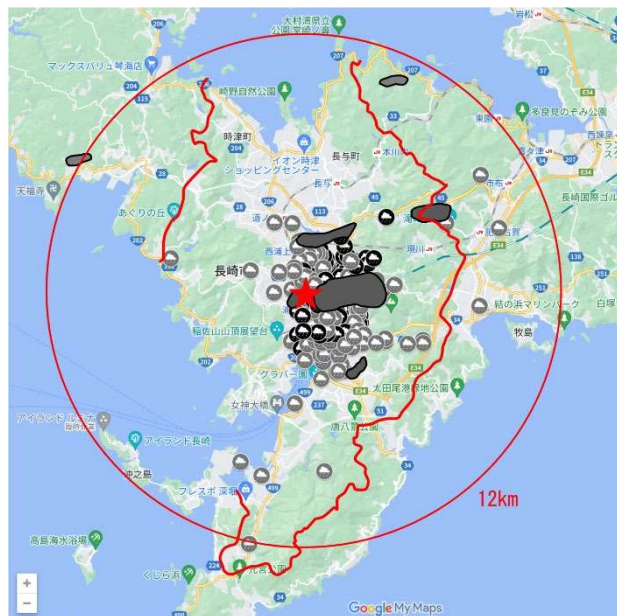
ABCCは昭和25年の国勢調査にあわせて広島、長崎の被爆者を対象に大規模な疫学調査を開始した。疫学調査はLSS（寿命調査）と呼ばれ、その基本情報を収集する目的で作成されたのがMSQと呼ばれる調査票である。作成されたMSQの総数は広島約138,000人、長崎約23,000人の計約161,000人とされている。このうち120,321人がLSSの対象者である。LSSは直接被爆者を対象として実施され、LSS対象者12万人のうち、93,741が「直接被爆者」である。

「直接被爆者」以外は「原爆時市内不在者（NIC）」と呼ばれ、「直接被爆者」の対照群とされた。LSSは現在も続けられており、対象者の被曝線量と総死亡、癌、慢性疾患による死亡数との関係が調査された。その結果、被曝線量と癌死亡の間には量反応関係があることが証明された。100mSv以上の被曝で癌のリスクが増えるとする疫学データの根拠ともなっている。MSQ調査票には、「雨」に関する質問項目として、「原爆直後雨ニ逢イマシタカ？」（はい・いいえ・不明）、「何処で」の設問が設けられていた。MSQ以前に作成されたMQと呼ばれる調査票にも雨に関する設問があった。LSS対象者のうち、広島で12,269人、長崎で853人が「雨」に遭ったと回答した。LSS以外の各種調査対象者のうち、広島で2,364人、長崎で51人が「雨」に遭ったと回答した。

MSQの「雨」地点データは平成23年12月に放影研により公開された。MSQはLSSの基礎をなすものであり、調査はABCCの職員による聞き取りで行われ、結果の信憑性は高い。MSQの「雨」地点をGoogleのデジタルマップにプロットし、原爆被爆地域図の黒い雨の降雨地帯と重ねたのが図7である。それぞれ離れていた原爆被爆地域図の黒い雨の降雨地帯が一つとなり、長崎原爆の雨域の一部が初めて明らかとなった。長崎の「雨」地点のほとんどは「直接被爆



者」群の中にあり、MSQの雨域は爆心地を中心に広がっているが、被爆未指定地域の古賀村、矢上村の東望（東望は矢上の地名）、間の瀬、喜々津村西川（西川内）が含まれている。



昭和20年	長崎測候所の記録、仁科ノート
昭和28年	原子爆弾災害調査報告集
昭和52年	長崎原爆戦災誌第1巻資料編
昭和58年	長崎原爆戦災誌第5巻資料編
昭和60年	長崎原爆戦災誌第3巻続地域編
昭和61年	原爆被爆地域図(初版)
平成23年	ABCCのMSQ調査による雨地点

ABCC ● 1～4人 ● 5～9人

図7 ABCCのMSQ調査による雨地点

### 原子爆弾被爆未指定地域証言調査

広島県の「黒い雨訴訟」に対する広島高裁の判決を受けて出された厚生労働省健康局長通知（令和4年3月18日）に対し、長崎県は「長崎の黒い雨等に関する専門家会議」を設置した。専門家会議の目的は、「過去の被爆体験者訴訟との整合性について」と「被爆地域以外での降雨があったとする客観的事実について」であった。専門家会議は被爆地域以外での降雨があったとする客観的事実を証明するために、平成11年に実施された原子爆弾被爆未指定地域証言調査のうち、自由意見を記載した7,025件のうち「雨」に関する記述のある129件を抽出し分析した。その129件を図7のデジタルマップに重ねたのが図8である。

「雨」に遭ったという証言は日見、東長崎地区を始めとして被爆未指定地域全域で認められた。

(単位:件)

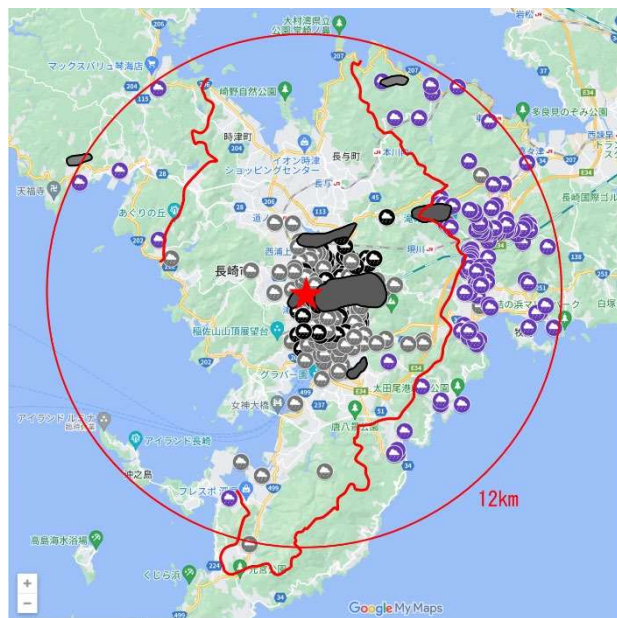
	茂木町	日見村	矢上村	戸石村	古賀村	式見村	三重村	深堀村	香焼村
総件数	1,581	392	785	791	501	616	500	648	266
黒い雨・雨に関する記述	10	9	42	6	43	1	2	1	0
	0.6%	2.3%	5.4%	0.8%	8.6%	0.2%	0.4%	0.2%	0.0%

	伊王島村	村松村 子々川郷	村松村 西海郷	伊木力村	大草村	喜々津村	田結村		合計
総件数	166	50	112	533			84		7,025
黒い雨・雨に関する記述	0	0	1	6	2	4	2		129
	0.0%	0.0%	0.9%	2.3%			2.4%		1.8%

表 1 被爆未指定地域の黒い雨・雨に関する記述と降雨体験割合

専門家会議は最終報告書で「証言集の証拠能力について、形式的証拠能力及び実質的証拠能力があると確認でき、集まった全ての証言から総合的に判断して、降雨があったと認定することができる。また、証言集の降雨体験の統計的な検証等の結果、客観的な資料と認められる。」と結論した。



昭和20年	長崎測候所の記録、仁科ノート
昭和28年	原子爆弾災害調査報告集
昭和52年	長崎原爆戦災誌第1巻資料編
昭和58年	長崎原爆戦災誌第5巻資料編
昭和60年	長崎原爆戦災誌第3巻続地域編
昭和61年	原爆被爆地域図(初版)
平成11年	原子爆弾被爆未指定地域証言調査
平成23年	ABCCのMSQ調査による雨地点
令和4年	長崎の黒い雨等に関する専門家会議

ABCC ● 1~4人 ● 5~9人 証言調査 ●

図 8 ABCC の MSQ 調査による雨地点+証言調査

## 被爆体験記調査

令和5年7月から令和6年6月にかけて国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館所蔵の被爆体験記調査が行われた（図9）。

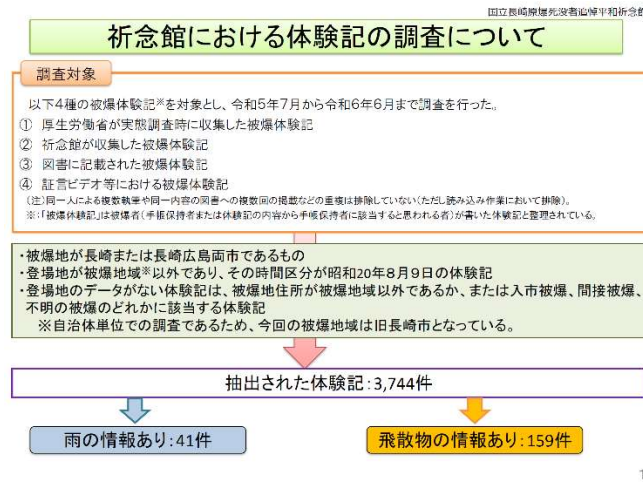


図9 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館所蔵の被爆体験記調査

3,744 件の体験記が抽出され、うち「雨」に関する情報が 41 件確認された。41 件のうち爆心地から 12km 圏内のものは 22 件だった（図10）。



図10 被爆体験記調査の雨の情報の数

その 22 件を図 8 のデジタルマップに重ねたのが図 11 である。

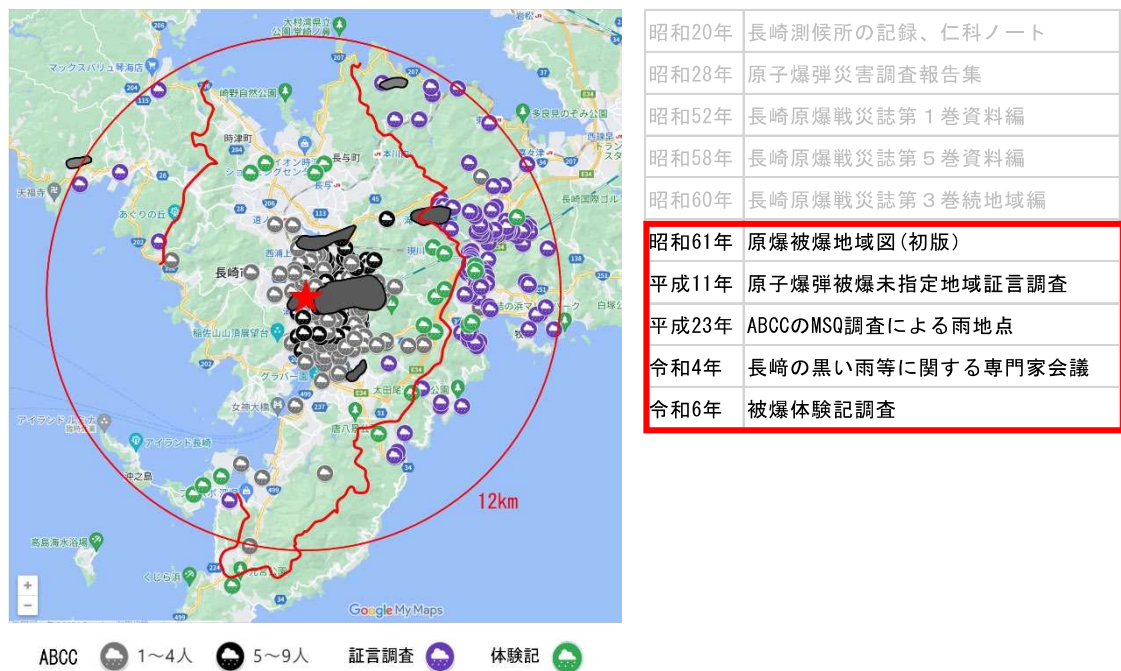


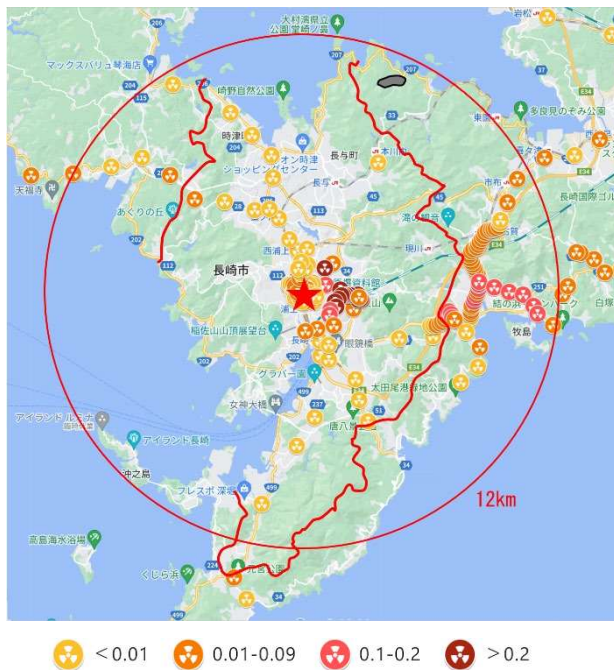
図 11 ABCC の MSQ 調査による雨地点＋証言調査＋被爆体験記調査

体験記の「雨」情報の件数は少ないが、時津、長与、中尾、現川といった第一種健康診断特例区域からの「雨」情報が得られた。これにより爆心地から北の「雨」情報が確認され、爆心地から全方位の遠距離で「雨」が降ったことになる。また、爆心地を中心とした ABCC の「雨」情報と証言調査の「雨」情報の連続性が示された。

### マンハッタン調査団の放射線測定データ

米国マンハッタン調査団は原爆投下直後、昭和 20 年 9 月 20 日から 10 月 4 日にかけて長崎で被爆者の健康影響、残留放射線を測定した。

マンハッタン調査団は爆心地を中心とした長崎市内及びジープで長崎各地の道を走行しながら Victreen 社製の GM 管で残留放射線を測定した。測定結果はマンハッタン調査団最終報告書の付録 B に収録された。付録 B の測定結果は平成 24 年に発見され、それをデジタルマップにプロットしたのが図 12 である。



昭和20年	長崎測候所の記録、仁科ノート
昭和28年	原子爆弾災害調査報告集
昭和52年	長崎原爆戦災誌第1巻資料編
昭和58年	長崎原爆戦災誌第5巻資料編
昭和60年	長崎原爆戦災誌第3巻続地域編
昭和61年	原爆被爆地域図(初版)
平成11年	原子爆弾被爆未指定地域証言調査
平成23年	ABCCのMSQ調査による雨地点
平成24年	マンハッタン調査団放射線測定データ
令和4年	長崎の黒い雨等に関する専門家会議
令和6年	被爆体験記調査

図12 マンハッタン調査団放射線測定データ

残留放射線は西山地区から日見、東長崎地区にかけての東方にかけて高く、爆心地から12km圏内全域のみならず1kmを超えて観測された。

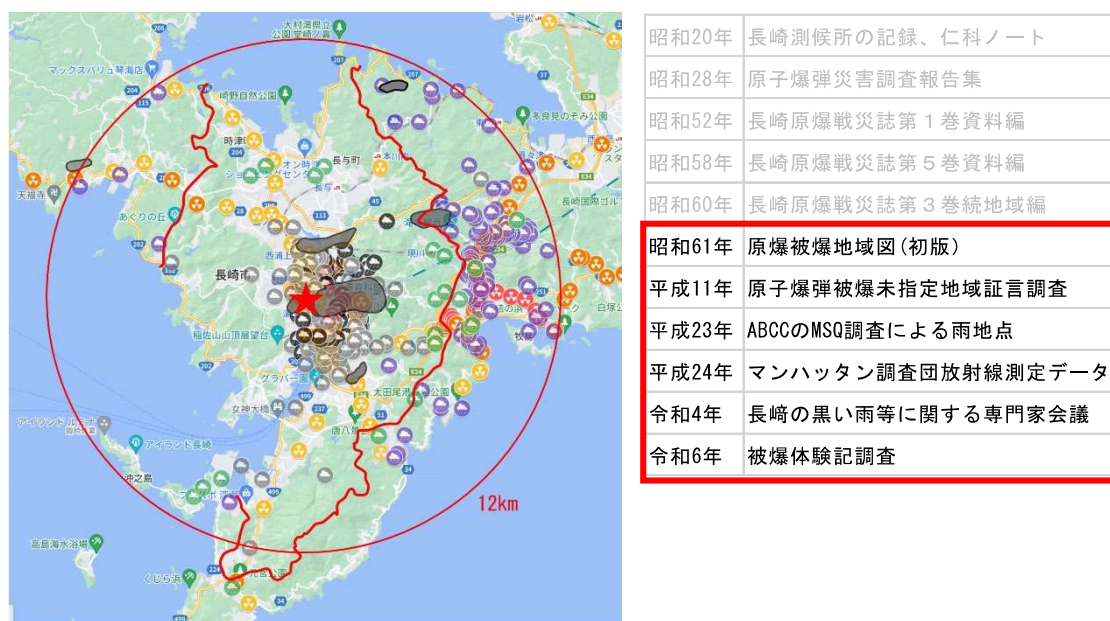
### まとめ

原爆被爆地域図(初版)は長崎県市が作成した公的なものであるが、降雨地帯が7ヶ所と少ない。平成11年の証言調査は自由意見の中からの「雨」情報のため降雨の有無だけでなく雨が降った時の状況が記録されている。「長崎の黒い雨等に関する専門家会議」は降雨に関する記述があった人の割合を降雨体験割合として、地理的分布を統計学的に解析し、統計的有意な差が認められたことから「実際に降雨があったことを示しているものと解釈できる」とした。一方で、証言調査は被爆未指定地域住民を対象に行われたために被爆地域の「雨」の情報は含まれていない。逆にABCCのMSQ調査による雨地点は主として直接被爆者を対象に行われたため、被爆未指定地域の雨情報が少ない。しかし、調査時期が昭和25年と他の調査より圧倒的に被爆からの期間が短く、またABCCによる調査であることから信憑性が高い。被爆体験記調査は「雨」に関する抽出数が少なく、厚生労働省は「降雨等を客観的事実として捉えることはできなかった」と

結論した。しかし、被爆体験記調査には ABCC の MSQ 調査や平成 11 年の証言調査には含まれない「雨」情報も含まれており貴重である。

このように、原爆被爆地域図（初代）、平成 11 年の証言調査、ABCC の MSQ 調査、被爆体験記調査にはそれぞれに一長一短がある。しかし、それらを組み合わせると図 11 のように爆心地から 12km 圏内全域に雨が降ったことが明らかとなった。

「黒い雨」とは原爆の放射性物質を含んだ雨のことを指す。マンハッタン調査団の放射性測定データに長崎原爆の「雨」データを重ねたのが図 13 である。「雨」が降った地域と放射線が測定された地点はよく一致する。これは 12km 圏内全域で「雨」が降ったという物的証拠であり、客観的事実の証明といえる。



ABCC 1~4人 5~9人 証言調査 体験記 <0.01 0.01-0.09 0.1-0.2 >0.2

図 13 マンハッタン調査団放射線データ+雨地点

## 第2章 各論

図14は専門家会議報告書の平成11年証言調査における被爆未指定地域の雨、灰の証言件数である。

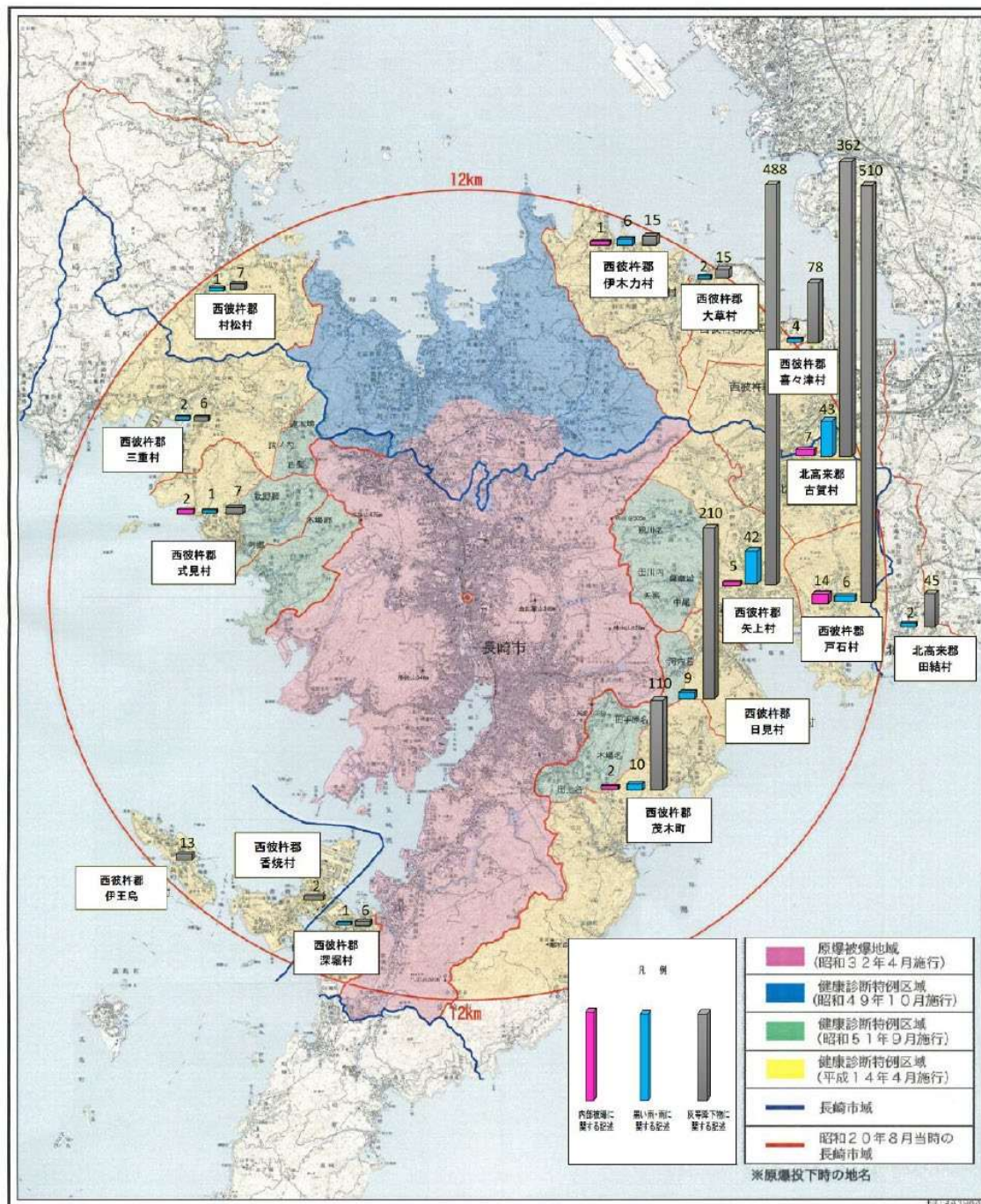


図14 専門家会議報告書の被爆未指定地域の灰、雨の証言件数

国は平成 11 年度証言調査について「バイアス（リコールバイアス、レポーティングバイアス等）が介在している可能性が否定できず、これを事実認定の根拠に用いることは相当でない」と主張する。

これに対して「長崎の黒い雨等に関する専門家会議」は証言調査の証拠能力について、「日時・場所が特定されており、内容等が具体的で客観的事実と整合するリアルな体験に基づくものの方が、実質的証拠能力（証拠価値）が高い」とした上で「集まった全ての証言メモから総合的に判断して、黒い雨等が降ったと認定することが可能と考える」と結論した。

各論では被爆未指定地域の地域ごとに各種調査の証言の信ぴょう性を、総論での述べた各種調査の結果と合わせて考察し、「雨が降ったという客観的証拠」といえることを確認する。

## 日見村

図 13 の日見村の拡大図を図 15 に示す。



図 15 図 13 の日見村の拡大図



日見村にはマンハッタン調査団のロード1とロード12の放射線量が記録されている。拡大図ではイヤホンのカウント40以上の地点を表示した。マンハッタン調査団の測定は線量が低い場合にはイヤホンのカウントで計測したが線量が高くなるとGM管のメータで測定した。GM管のメータは線量が高くなるにつれてスケール3→2→1と切り替えて測定した。日見村は線量が高くロード1のほとんどがスケール3で測定されている(図16)。

走行距離	測定地の説明	ガンマ線量			
		スケール	値	回/分	線量
	最初の貯水池で走行距離を0にセット				
2.1	道沿いの草			42	0.006
2.2	道沿いの草			50	0.009
2.3	道沿いの草			67	0.017
2.4	道沿いの草	3	1.3		0.025
2.5	道沿いの草	3	1.5		0.035
2.6	アスファルト道路沿い	3	2.0		0.045
2.7	アスファルト道路沿い	3	2.2		0.05
2.8	アスファルト道路沿い	3	2.5		0.055
2.9	道から1フィート入った草地	3	4.5		0.1
3.0	道から1フィート入った草地	3	7.0		0.175
3.1	道から10フィート入った草地	3	7.5		0.19
3.2	道から10フィート入った草地	3	7.5		0.19
3.3	道から10フィート入った草地	3	3.5		0.076
3.4	道から10フィート入った草地	3	2.0		0.045
3.5	急斜面の道沿い	3	1.5		0.035
3.6	草地に10フィート入った道沿い			43	0.007
3.7	道から10フィート入った草地、両側急斜面			40	0.006
3.8	片側急斜面の道沿い			50	0.009
3.9	道から10フィート入った裸地			38	0.003
4.0	水田の道沿い	3	1.8		0.04
4.1	草地に4フィート入った道沿い	3	2.0		0.045
4.2	道沿い	3	3.0		0.067
4.3	道沿い	3	4.0		0.09
4.4	交差点からの脇道	3	5.0		0.12
4.5	道沿い	3	5.8		0.145
4.6	道から5フィート入った地点	3	6.0		0.015
4.7	道から10フィート入った村の中の地点	3	4.0		0.09
4.8	道沿い	3	7.5		0.19
4.9	道から10フィート入った水田近くの地点	3	5.0		0.12
5.0	道沿い	3	6.0		0.15

図16 マンハッタン調査団 ロード1(東長崎詳細)(10/4)の測定結果

日見村では証言調査から9件、被爆体験記調査から2件の「雨」に関する証

言がある。

特に証言調査の証言 No.15 は長崎原爆のキノコ雲が経時的にどのように変化  
したかを精緻に描写しており具体的かつ迫真性に富む (図 17)。

原爆が投下された時いた場所 西彼杵郡 町 郷 番地 日見 村 網場 名
原爆が投下された時だれと一緒にいましたか。 近所の友人 [ ] 君
原爆が投下された時どこで何をしていましたか。また、その時の周囲のありさまをくわ しく書いてください。昭和20年8月9日(木) 原子爆弾落下、当時日見国民学校 6年生であった私は、午前9時頃警戒警報発令中だったが、上空はよく晴れわり 気温も30℃位だった。余り熱いので近所の同級生や下級生と一緒に網場湾内で 水泳中、突然上空に巨大な塊が爆発する瞬時の閃光と熱線を感じて、 驚いた。私は、そのまゝしばらくのあいだ茫然として、何が起ったか判断もできず 気が遠くなっていたのである。長い時間のようにもあったが、ひと私は、怒る怒る 長崎上空を見ると、巨大な白いきのこ状の雲が見るみるむくむくと盛り上がり 湧きかえらては、赤黄青紫黒、等 パレットの上の絵具をそのままナイフで混ぜ 合わせるような不思議な色彩の雲の乱舞が繰り上げられ、恐怖とも感動とも つかない恍惚境の中で、私は、天国とも地獄とも思える壮大な神秘的な 世界に自分を忘れていた。私は何か起ったに違いないと思い、急いで 網場の棧橋に上がり、不安の中にも次第に自信をとりもどし、心の余裕を 持ちはじめた。きのこ状の雲は、次第に拡散して青空を蔽ってしおと天は どんよりと、日食時のように薄暗くなり、遂に太陽は、月のようにハッキリと その輪郭を示して、赤い明度で停止していた。急いで帰宅して、家の中を見ると

中略

家のがれつけが終って、網場道(国道)の方へ行途中、長崎の方は真黒く火煙が燃え上がり 襖、障子紙の燃えがすが、あたり一面に次から次へと飛んでくる。牛車の上には、怪我人や 死にそうになった人などが運ばれ、諫早方面へと急いでた。帰宅途中、やがて油のような 黒い雨が降ってきて、白いシャツに黒い斑点を作った。……
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

図 17 日見村の住民の証言

原爆に遭った場所、日時が正確で、原爆が炸裂してからキノコ雲が拡散して空を覆い、太陽が赤く浮かんでいるように見えるまでの様子が目に浮かぶ。空に浮かぶ赤い太陽、空から色々なものが降ってくる様子は日見、東長崎の住民の多くが記憶している。この証言は「帰宅途中やがて油のような黒い雨が降ってきて、白いシャツに黒い斑点を作った。」と結ばれている。雨に濡れた様子も具体的であり、この証言にバイアス（リコールバイアス、レポーティングバイアス等）が介在する余地はない。

雨の色が黒かったことについて、日見村の証言 No.11「しばらくすると空は黒く曇り、太陽は真っ赤になり、ちらちら雨が降り落ちてくる。雨は身体に付くと黒く汚れていた。」、証言 No.16「大人たちから防空壕にいるよう指示があり、そのうち雨（真っ黒い雨）が降ってきたような記憶が残っています。」と同様の証言がある。

証言 No.12 は日見小学校で原爆にあった証言である。「晴天であったが投下後しばらくして原子雲が浮き上がり、少量であったが雨が降ってきたのを覚えている。」

同じく日見小学校で原爆にあった証言が被爆体験記調査の中に2件ある。1件は被爆時年齢19歳、もう1件は被爆時年齢20歳である。被爆体験記調査は被爆者を対象としているのでレポーティングバイアスは働かない。証言調査と被爆体験記調査という2つの異なった調査で同じような証言が得られるということは証言の信ぴょう性を裏付けるものである。「長崎の黒い雨等に関する専門家会議」のいう「日時・場所が特定されており、内容等が具体的で客観的事実と整合するリアルな体験に基づくもの」であり、実質的証拠能力（証拠価値）が高い。

さらに「長崎の黒い雨等に関する専門家会議」の日見村の降雨体験割合は2.3%と古賀村、矢上村、田結村に次いで高い。

降雨体験割合が高く、証言調査と被爆体験記調査という2つの異なった調査で実質的証拠能力（証拠価値）が高い証言があり、かつマンハッタン調査団の測定で残留放射線という物的証拠があることから、日見村において「雨」が降った客観的証拠があるといえる。

## 間の瀬地区

間の瀬は矢上村の北部に位置し、爆心地から北東約 7.5Km にある山間の小集落である。原爆投下時の住民数約 320 名。原爆投下後の間の瀬に黒い雨が降ったことは地元の住民にとって公知の事実である。

平成 23 年、長崎県保険医協会は間の瀬地区住民に対して聞き取り調査を行った（表 2）。

No		被爆時年齢	世帯数	黒い雨	下痢	吐き気	歯肉出血	脱毛			時期	程度	
								本人	家族				
1	患者	男性	8	4	降った	記憶なし	記憶なし	記憶なし	無し	有り	母、姉	9月以降	軽度
2		男性	9	3	降った	無し	無し	無し	無し	無し			
3		男性	11	8	降った	無し	無し	無し	有り	有り	母	1年後	軽度
4		女性	10	3	降った	不明	不明	不明	無し	無し			
5		女性	14	7	降った	不明	不明	不明	有り	有り	父、母、姉	9月以降	軽度
6		男性	8		降った	不明	不明	無し	有り	有り	同上	9月以降	軽度
7		男性	16	7	-	無し	無し	無し	無し	無し			
8	調査票	男性	11	6	降った	有り	不明	不明	有り	有り	母	盆過ぎ	軽度
9		男性	9		降った	有り	有り	記憶なし	有り	有り	父	盆過ぎ	軽度
10		男性	17	9	降った	無し	記憶なし	記憶なし	有り	有り	妹	盆過ぎ	軽度
11		男性	9	5	降った	有り	有り	無し	無し	有り	父、母	9月中旬	軽度
12		男性	3		降った	記憶なし	記憶なし	記憶なし	記憶なし	有り	兄	不明	中等度
13		男性	5	7	降った	無し	無し	無し	無し	無し			
14		女性	5		降った	記憶なし	記憶なし	記憶なし	記憶なし	有り	その他	不明	軽度
15		女性	6		降らない	記憶なし	記憶なし	記憶なし	無し	不明			
16		女性	7		記憶なし	記憶なし	無し	無し	無し	不明			
17		男性	6		記憶なし	記憶なし	記憶なし	記憶なし	無し	不明			
18	男性	6		記憶なし	記憶なし	記憶なし	記憶なし	無し	無し				
19	女性	1		記憶なし	記憶なし	記憶なし	記憶なし	記憶なし	不明				
20	男性	5		記憶なし	記憶なし	記憶なし	記憶なし	記憶なし	記憶なし				

表 2 間の瀬住民の聞き取り調査（平成 23 年長崎県保険医協会）

当時の記憶がある 15 名のうち、No.7（原爆投下時間の瀬を不在にしていた）と No.15 を除く 13 名が「雨が降った」と回答した。

間の瀬および周辺地区の「雨」に関する証言の中から M.Y. の証言を引用する。新田頭（にたんとう）は間の瀬地区の土地の名称である。

---

M.Y. 男性 被爆時年齢 9 歳

母、兄弟は戦時中に亡くなり、当時祖母と父との 3 人暮らし。原爆投下時は新田頭の自宅にいた。爆風で建具が倒れた。急いで 1 Km ほど離れた従兄弟の家に向かった。その途中で足をすべらせて崖から転落、腰を強打し、動けなくなった。その時に雨が降ってきて、びしょり濡れた。その後にゴミがいっぱ

い降ってきた。雨が先かゴミが先かははっきりしない。雨の色は覚えていない。自力で崖を登り、従兄弟の家についたときには雨はあがっていた。地面は雨で濡れていた。

---

M.Y.は当院の患者であり、いまだ健在で原爆投下時と同じ家に住んでいる。筆者はその家を訪問し、証言にある避難した道も確認した。証言は具体的で雨が降ったときの状況をよく示している。さらに長崎県保険医協会の聞き取り調査から間の瀬の雨の様子を抜粋すると、

S.T.「夕立のような雨が降ってきて濡れた。それほど強い雨ではなかった」

M.F.「雨は10分かそこいらの通り雨だった」

N.M.「帰る途中で雨が降って雨に少し濡れた」

T.T.「間もなく、にわか雨が降った。雨が降っていた時間は30分位か」

N.F.「家に帰ってから10分ほどしてザーザーと雨が降った。家に入れずに雨に濡れた。雨が降っていた時間は20分位」

T.I.「小雨が降って濡れた。そう長くは降らなかった」

T.M.「焼き場の灰のような黒い雨が降ってきて濡れた」

K.Y.「それから夕立のような雨が降り、外に出てみると雨の色が黒かった。雨に打たれながら「なして雨の黒かとやろか？」と家人と話しあった記憶がある。雨が降ったのは10分～20分位」

このように「雨」についての表現はそれぞれであるが、共通するのは「雨が降ったこと」「雨が降ったのは10～20分」であることである。これらの証言はいずれも具体的であり、雨が降った状況、時間も共通していることから、これをバイアス（リコールバイアス、レポーティングバイアス等）で否定することはできない。

長崎県保険医協会の調査の24年前の昭和62年に間の瀬の住民を対象としたアンケート調査が行われた。表3は平成23年調査時間の瀬の自治会長をしていたM.T.が保存していた当時の調査結果をまとめた表である。

間ノ瀬地区 生存者 健康調査				昭和62年7月11日現在				
氏名	性別	年齢	現住所	今日迄の病名	原爆時の場所	黒い雨に濡れた	空欄の回答	当座状況
高良 孝一	男	48	千葉県蘇我町 2-130	血圧高値検査	外庭	○	○	
" 勝奥	"	46	東京都日野市新井町	糖尿病	外	○	○	
" 節子	女	44	大坂府堺市旭ヶ丘(南) 1-23	子宮癌	外	○	○	
松尾 正芳	男	54	長崎市平岡町 2702-1	大腸 心臓病	庭	○	○	
" マチ	女	56	"	高血圧	畑	○	○	
" 高元	男	52	熊川町 19-11	血圧	庭	○	○	
● 茂隆	男	50	長崎市東町 2225	心臓病	"	○	○	歩けず
タツ子	女	48	" 東町 1077	低血圧	"	○	○	たふし
松尾 イン	女	71	" 平岡町	水晶体混濁白内障	田	○	○	
" マチ	女	60	長崎市平岡町	神経痛	畑	○	○	
" 義信	男	48	" 平岡町 2667	腰痛	外	○	○	
" のり子	女	45	"	風邪	"	○	○	
" 信義	男	45	北九州市若松区東二島	関節炎	外庭	○	○	
" 義一	男	47	長崎市平岡町 2725	低血圧	"	○	○	
● マチ	女	49	"	腰痛	田	○	○	
" 義昭	男		2660	低血圧	外	○	○	
平岡 マチ子	女	66			畑	○	○	
内田 元	男	44	長崎市矢上町 228-10		外			
" シ	女	75	"	高血圧	畑	○		
平岡 友子	女	41			外			
河原 靖江	男	26	" 2676	低血	道	○	○	
尾崎 レ子	女	42	" 長崎市平岡町	低血圧	"			

表 3 間の瀬住民のアンケート調査（昭和 62 年 間の瀬自治会）

昭和 62 年は原爆投下から 42 年目である。回答者の年齢をみても 40 歳台を中心に若く記憶もしっかりしている。間の瀬の住民に限らず、被爆者の聞き取りをしていると被爆時の年齢が 3 歳くらいでも鮮明に当時の記憶があるという。原爆とはそれほど強烈な出来事だったといえる。アンケート調査に回答したほぼ全員が「黒い雨に濡れた」に○をつけている。その時の場所も「外」「庭」「畑」などしっかり記載されている。○が空欄の回答者をみると年齢が 41～44 歳で原爆投下時年齢が 2 歳以下の住民であり、雨の記憶のない住民は正直に空欄で回答している。これは平成 23 年の長崎県保険医協会の聞き取り調査でも同様である。

アンケートの結果を報道した読売新聞の記事が図 18 である。間の瀬（間の瀬）地区の生存者 186 人のうち、記憶の確度が高い当時 8 歳以上の 112 人について集計したところ、「雨」「灰」とともに 9 割の人が「降った」と回答した。

## ゆがんだ同心円

### 長崎被爆42年

東京都の作家で医学翻訳家の広瀬隆さん(四四)は、ちょっと変わった本を書いた。アメリカの映画スター、ジョン・ウェインはじめ西部劇の俳優の四割がガンで死んだことを調べあげ、ネバダ砂漠での大気核実験のせいだとした。風下の西部劇のロケ地が、放射能を含む、死の灰(放射性降下物)で被曝(ばく)したというのだ。近くの小さな町にも、小児白血病やガンが多発した。「百以上の町内に七人もの白血病患者が

出たのは偶然でしょうか」と北東、間之瀬に向けて吹いている住民の訴えを紹介した。その言葉は、間之瀬(長崎市平間町)の叫びにも重な

間之瀬自治会(西川徳馬会長、八十世帯)が調べた原爆投下後の雨と灰に関する住民アンケートがある。生存者百八十六人のうち、記憶の確度が高いと思われる当時八歳以上の百十二人が対象だが、雨、灰ともに九割の人が「降った」と答えている。被爆者団体「長崎県被爆者手帳友の会」の調査でも、間之瀬を含む東長崎地区では、八六・一%が灰、五七・九%が雨が降ったと答えた。

長崎測候所の記録によると、原爆が落ちた時は快晴。南西の風三時。風は爆心地の

自給自足の間之瀬では、畑の力ボチャなどに積もった白い灰を払って食べたと言言する人もいる。水道もないので、生活用水は、埴落を流れる小川や浅井戸に頼っていた。被爆直後から目を悪くして失明しかけたという三田村

図 18 アンケート結果を報じた読売新聞記事 (昭和 62 年 7 月 25 日)

平成 11 年の証言調査でも間の瀬 (間ノ瀬) 地区の降雨体験割合は 36.4%と他の地区に比べて突出して高い (表 4)。

地区	証言者数(人)	体験者数(人)	体験割合(%)	95%信頼区間	
矢上村 平間名	136	25	18.4	11.9	24.9
矢上村 平間名間ノ瀬	33	12	36.4	20.0	52.8 (再掲)
矢上村 平間名間ノ瀬以外	103	13	12.6	6.2	19.0 (再掲)
古賀村 松原名	128	11	8.6	3.7	13.4
古賀村 向名	124	9	7.3	2.7	11.8
古賀村 中里名	109	10	9.2	3.8	14.6
古賀村 木場名	119	11	9.2	4.0	14.4
矢上村 町名	132	4	3.0	0.1	6.0
矢上村 東名	215	7	3.3	0.9	5.6
矢上村 田中名	209	3	1.4	-0.2	3.0
計	1,172	80	6.8	5.4	8.3

表 4 専門家会議報告書の矢上・古賀村の地区別降雨体験割合

矢上村

図 13 の矢上村を中心とした拡大図が図 19 である。矢上村の北は前述の間の瀬地区である。間の瀬地区は平間名 (ひらまみょう) に含まれる。間の瀬地区

と矢上村の中心部とは1本の道で結ばれているが、その周囲は山で民家は少ない。矢上村の中心部に近づくにつれて平地が広がり、単に平間名といえ、この付近を指す。

矢上村の西部の中尾と現川は第一種健康診断特例区域となっている。



図 19 図 13 の矢上村の拡大図

表 4 に示されるように間の瀬地区について平間名での降雨体験の証言が多いが、それ以外の地区でもまんべんなく降雨体験の証言がある。証言調査だけでなく、矢上村の間の瀬地区には原爆被爆地域図（初代）に降雨地帯が記録され（図 6）、間の瀬地区と南部の東望（とうぼう）には ABCC の MSQ 調査で雨の記録があり、体験記調査でも矢上村も雨の記録がある。このように複数の調査で雨の記録があるということは偶然の一致ではなく、矢上村に原爆投下後の雨が降った有力な証拠である。

証言の内容も具体的である。田中名（たなかみょう）は中尾地区に続く矢上村の南部地区である。

証言 No.41 が図 20、証言 No.42 が図 21 で二人は一緒に矢次郎神社（図 19 に



図示) で遊んでいた。

原爆が投下された時どこで何をしていましたか。また、その時の周囲のありさまをくわしく書いてください。

朝から近くの天次郎神社で近所の子供達とペタやビー玉などして遊んでいたらしばらくして3B29が10機位空高くキラキラ光りながら長崎の方向へ飛んで行ったしばらくして又一機長崎の方向へ消えたと思っていた時です。ピカッと光ったかと思ったとたんゴーと言う音とともには暴風がきて飛ばされそうになったので大きなたぶり木の根っ子に耳や目などおさえてるせていた。暴風が止まったのであたりを見ると近所の家のガラスや壁がぶっ壊れていた。ふと長崎の方を見た時、中尾岳の空は真っ赤にやけ燃え上がる炎を見た時です。燃えた紙屑や灰などが飛んで来て見る見る灰の町になったのを見ていた時、今度は(黒い雨)が降って来たので家に帰って見たら暴風で家の壁は倒れガラスは壊れ、座敷のガラスやガラスの障子の木の下の火煙も飛ばしていた事が記憶に残っています。

図 20 証言 No. 41 の証言

原爆が投下された後のその日の行動を書いてください。

神社の大きな木の下で友達と遊んでいた時、光線と爆音に驚き、木の下に身をかがせて、はやくはやく逃げたので、周りは家のガラスや壁等がぶっ壊れていて、中尾岳の空は真っ赤に燃えた紙屑も、土も、降って黒い雨が降って来たので、おそろしく家に走って帰った。自分の家も、火の煙に焼けていたので、呆然と、ひたひたして、体が震えた。

図 21 証言 No. 42 の証言

二人の証言の記述は異なる(図 20、21)が、雨に関する表現は一致している。No.41「中尾岳の空は真っ赤にやけ、燃え上がる炎を見た時です、燃えた紙屑や灰などが飛んで来て、みるみる灰の町になったのを見ていた時、今度は黒い雨が

降って来た」

No.42「中尾岳の空は真っ赤になり、燃えた紙くずがヒラヒラと降って、黒い雨も降って来たので、恐ろしくてとにかく家に走って帰った」

これは二人が見た光景が同じであり、紙くずや灰と一緒に黒い雨が降ってきた事を示し、証言の信ぴょう性が高い。

二人の証言に出てくる中尾地区に体験記の証言がある。

「ビラが雪の様にヒラヒラと舞ってきたのを憶えています。庭先の木々に夕方だったと思いますが、コーヒ色（原文ママ）した雨がふってきました。」

「黒い雨」という表現はよくあるが、「コーヒ色した雨」は珍しい。図 20、21 の証言ともよく一致する。体験記は被爆者の記録であるからレポーティングバイアスは働かない。

矢上村のマンハッタン調査団の測定は図 16 に示すようにイヤホンではなくスケール 3 で行われ、高い残留放射線が確認されている。

矢上村では降雨体験割合が高く、内容は具体的であり、複数の異なった調査で降雨の証拠があり、かつマンハッタン調査団の測定で残留放射線、次に述べる原爆由来のプルトニウムが検出されたという物的証拠があることから、矢上村において「雨」が降った客観的証拠があるといえる。

### 土壌プルトニウム調査

平成 23 年 7 月、星正治らは西山地区から東長崎地区にかけて土壌サンプリングを行い、山本政儀らがサンプル土壌中のプルトニウムを測定した。プルトニウムの同位体であるプルトニウム 240 とプルトニウム 239 の比が測定され、この比が低ければグローバルフォールアウトではなく長崎原爆由来のプルトニウムといえる。

西山地区及び矢上村の現川、平間、戸石村の上戸石名（かみといしみょう）。戸石神社で長崎原爆由来のプルトニウムが検出された（図 22）。

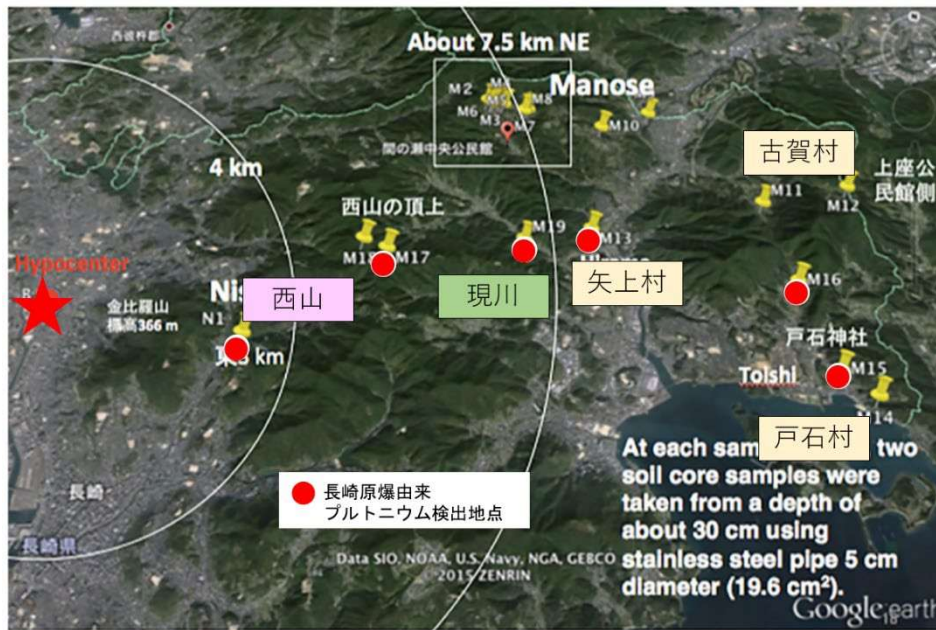


図 22 山本政儀らによる長崎原爆由来プルトニウム検出地点

山本政儀らによって長崎原爆由来のプルトニウムが検出された地点をデジタルマップに重ねたのが図 23 である。



図 23 長崎原爆由来プルトニウム検出地点とデジタルマップ

## 戸石村

図 24 は戸石村の住民だった T.S.が記憶をもとに描いた油絵である。



図 24 原爆投下後に戸石村から長崎市内を見た光景

T.S.は「真っ黒な煙がもうもうと立ち、その中に赤い火柱が見えました。あっという間に黒煙が襲い掛かってきました。太陽も空も見えないほど、ものすごい量の灰が降ってきました。爆風で長崎の方から紙やお金も降ってきました。家の屋根瓦には黒い灰がたくさん積もっていました」と証言している。

戸石村に降ったのは主として灰のようである。ただし短時間ではあるが「雨」も降った。

牧島の山中で原爆にあった平成 11 年証言調査の証言 No.67 は「またたく間に東長崎の上空一帯は真っ黒となり、太陽の姿も隠れていた。にわか雨の様な通り雨が降り、その後、茶色に変色して太陽の姿が火の玉でも落ちてくるかのように感じたと同時にものすごい灰を浴びたのを覚えている」と T.S.の絵に近い。

同じ牧島の海辺で原爆にあった「聞き取り集」の S.T. (被爆時年齢 8 歳) は「それから、空から灰が雪のように降ってきた。ゴミも降ってきた。灰やゴミは海面にも降って海面が灰色になった。海面に浮かぶ紙切れやお札を拾って遊

んだ。当時は女子もパンツ一枚だった。海からあがると降ってきた灰が体中に付着した。そのうち雨が降ってきて、濡れ、体に黒いすじを残して流れた。それでまた海に入って体を洗った。雨が降ったのは午後から夕方のように思う」と具体的である。

長崎原爆由来のプルトニウムが検出された戸石神社のすぐ近くでは証言調査の証言 No.65 が「長崎の方からは紙くずや真っ黒になった燃えカスや真っ黒な雨が降って来て、辺りは真昼だったのですが、まるで夕方様でした」、No.62 が「灰や紙くずが飛んで来ました。その後、黒い雨が降って来ました」と「雨」の証言がある。

もう一カ所長崎原爆由来のプルトニウムが検出された上戸石名でも証言調査の証言 No.63 が「午後 2 時頃灰と紙くずが飛んで来ました。その後、黒い雨が降って来ました」、証言 No.64 が「一番高い山で松の油を取っていました。その時、光や音、真っ黒い雨が降ってびっくりして、のどが渴いたので水を飲んで下へ下へと降りてきた」と具体的である。

戸石村の西にある田結村の池下にも「雨」の証言がある。「外に出て長崎の方を見たら、焼けた紙屑や落下傘や黒い雨や灰が降って、西の方から東の方に飛んで来ました」

さらにマンハッタン調査団の戸石村の測定（ロード 6）はイヤホンではなくスケール 3 で測定されるほど線量が高かった（図 25）。

走行距離	測定地の説明	ガンマ線量		
		スケール	値	回/分
121.5	大村方面と島原方面の交差点 (註：矢上から戸石に向かう交差点)	3	7.5	0.19
122.0	大村・島原方面道路	3	5	0.12
		3	6.5	
122.5	大村・島原方面道路	3	5	0.12
123.0	幹線道路	3	5	0.12
123.5	幹線道路	3	4.5	0.1
		3	5.5	
123.8	水道の端	3	4.5	0.1
124.5	海岸沿いの道 (註：橋湾沿い)			90
126.0	幹線道路	3	3	0.067
		3	5.5	

図 25 マンハッタン調査団 ロード 6 ((矢上～戸石～愛野) (9/28) の測定結果

「雨」に関する複数の具体的証言が存在し、同じ地区で長崎原爆由来のプルトニウム及びマンハッタン調査団の測定結果という物的証拠が存在するのであるから、戸石村において「雨」が降った客観的証拠があるといえる。

## 古賀村

平成 11 年の証言調査でも古賀村の降雨体験割合は間の瀬地区に次いで高い（表 4）。古賀村の全域で「雨」が降ったという証言がある（図 26）。



図 26 図 11 の古賀村の拡大図

上床（うわとこ）は古賀村の北東部にある山間の集落で、間の瀬地区とも近い。

平成 11 年証言調査には 3 人の上床の住民の証言がある。証言 No.73 「午後からは雨が降り続き、その中を私に会うために父が歩いて上って来ました」、証言 No.84 「お昼に家族の者が畑から帰って来て、飛んで来た紙切れを見て、長崎の方じゃなかろうかと言っておりました、大粒の黒い雨もポトポトと落ちて来ました」、証言 No.109 「雨が降って来て空が真っ黒になりました。黒い雨と灰が飛んで来て、今まで経験した事のない爆弾が落ちたのを感じました」

平成 23 年聞き取り調査で M.T.（被爆時年齢 17 歳）は「ゴミや灰がいっぱい降ってきた。昼からまた畑に行った。ゴミや灰とともに雨が降ってきた。雨

の色や時間は覚えていないが、当時を知る上床の人はみんな「黒か雨の降ったもんね」と言っていた」と証言している。上床の近くの矢竹（やたけ）の W.M.（被爆時年齢 21 歳）も「お腹に赤ちゃんがいたので（妊娠 8 ヶ月）、お腹をかばって伏せず、みんなで田んぼの岸にかがんだ。5 分位そうしていると、通りがかりの人から「おまえたちや、息はついとつとなあ」（あなた方は息をしているか？）と声をかけられた。間もなく雨がふってきた。その後に空からゴミがふってきて、稲の葉が真っ黒になった」と証言した。光景が目には浮かぶようである。平成 11 年証言調査と平成 23 年聞き取り調査でも同じような「雨」の証言がある。上床も矢竹も「雨」の降った間の瀬のすぐ近くである。長崎原爆戦災誌において田栗奎作氏は「古賀村の上床や田結村の開でも聞き取りを行い雨に関する証言はなかった」としているが、調査時期や聞き取りした人数の詳細は記載されていない。田栗氏が聞き取りした上床の住民が「雨」を記憶していなかっただけで、平成 11 年証言調査と平成 23 年聞き取り調査の証言を否定できるものではない。

「中河内クラブ」は戦時中に古賀村にあった青年会議所である。ここで原爆にあった 4 名の証言が平成 11 年証言調査に残されている。

No.92 「矢上方面の山の谷間から黒い入道雲がもくもくと上がり一瞬のうちに空がうす暗くなったと思うや焼けた紙が空一面にヒラヒラと舞うや、その時雨粒が降って来た」

No.94 「白いラッカサンが私たちのいる所の上空にフワリフワリと飛んで来て田結の方へ行った。当地の消防団の方がアメリカ人がラッカサンから降りて来るぞと言って前の道を行かれたのを覚えている。そして私たちは家に帰った。途中で雨が降って来た」、証言の「白いラッカサン」とは図 24 に描かれたラジオゾンデのことである。

No.95 「家に帰る途中雨も降った」

No.96 「北西部の方に大きな煙の玉が上がり、やがて曇って薄暗くなり、大粒の雨が少し降りました」

「中河内クラブ」にいた 4 人がそれぞれに「雨」を証言している。ラジオゾンデが落下した時刻は図 4 の「原爆被爆地域図」に記録されており、11 時 30 分

から午後1時の間であり、4人が雨にあったのは8月9日の午後1時前後と推定される。4人の証言の信ぴょう性は高い。

上座（じょうざ）は古賀村の西、戸石村との境界にある山間の集落である。平成11年証言調査の証言 No.103は「里芋の葉には焼けた灰が積り字が書ける位でした」としたあとで「頭にかぶっていた手拭いがしっとりするほど小雨もありました」と証言した。田栗奎作氏は「里芋の葉に灰が積もって文字が書けたということなので雨は降らなかったと推定されている」（甲A7p, 192）と指摘するが、里芋の葉に灰が積もって文字が書けたからといって雨が降らなかったことにはならない。

平成23年聞き取り調査でH.M.（被爆時年齢11歳）は「しばらくして煙が空を覆い、燃え滓や灰のようなものが降り注ぎ、ペターッ、ペターッと黒い泥のような、コールタールのような雨粒が顔にあたった」と証言した。

上座においても平成11年証言調査と平成23年聞き取り調査で「雨」の証言がある。

さらにマンハッタン調査団による古賀村の測定（ロード1）はイヤホンではなくスケール3で測定されるほど線量が高かった（図27）。

5.8	水田の先の道沿い		3	3.0		0.067
5.9	水田の先の道沿い		3	2.5		0.055
6.0	水田の先の道沿い	矢上村	3	2.5		0.055
6.1	道沿い		3	2.5		0.055
6.2	道沿いにある溝を越えた地点		3	3.3		0.075
6.3	道沿いにある溝を越えた地点		3	3.3		0.075
6.4	側に岩がある深く入り込んだ（約25フィート）道沿い		3	2.5		0.055
6.5	水田の先の道沿い		3	2.5		0.055
6.6	道沿い	古賀村	3	1.7		0.035
6.7	道沿いの埋め立てられた地点		3	1.5		0.035
6.8	水田の先の道沿い		3	1.0	80	0.023
6.9	水田の先の道沿い				63	0.015
7.0	道から3フィート入った地点				80	0.023
7.1	道沿い		3	1.2		0.024
7.2	切通と建物の間				55	0.012
7.3	切通の脇道				46	0.008
7.4	道から10フィート入った草地				43	0.007

図27 マンハッタン調査団 ロード1（東長崎詳細）（10/4）の測定結果



複数の調査で「雨」に関する複数の具体的証言が存在し、同じ地区でマンハッタン調査団の測定結果という物的証拠が存在するのであるから、古賀村において「雨」が降った客観的証拠があるといえる。

## 健康実態調査並びに死没者調査

健康実態調査並びに死没者調査は昭和 62 年に長崎県被爆者手帳友の会が実施した調査である。

調査方法：

### 1. 調査地区

矢上、古賀、飯盛（池下）の三地区の住民

註：池下（いけしも）は戸石村の西に接する旧田結村（たゆいむら）の地区で、場所は図 23 に記した。昭和 30 年に隣の江ノ浦村と合併し飯盛村（いいもりむら）となった。

### 2. 調査期間

昭和 62 年 5 月から 6 月までの間

### 3. 標本数

対象地区の世帯主 392 人中、大正元年から昭和 20 年に生まれた 309 人（調査時年齢 42 歳から 74 歳）を採用。対象者世帯の 20%程度と推計。

### 4. 生存者健康調査

被爆当時の 0 歳から 31 歳までの人に限定。有病率の高い明治生まれの人（調査時年齢 75 歳以上）は除外。

標本 309 世帯調査時に体の不調を訴える 415 人について障害割合を調査。

### 5. 死没者調査

被爆時に同居していた家族で、その後死亡した人の死因調査。

### 6. 灰に関する調査

被爆したときに灰をかぶったか。

### 7. 雨に関する調査

被爆したときに雨に濡れたか。

調査結果：

生存者健康調査

障害割合は健康管理手当の対象 11 疾病に精神疾患を加えた疾病に分類されている (図 28)。

生存者健康調査表

(単位: 人.%)

標本数	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)
	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害
415 100.0	31 (7.5)	31 (7.5)	20 (4.8)	20 (4.8)	4 (1.0)	108 (26.0)	25 (8.4)	5 (1.2)	11 (2.7)	62 (14.9)	23 (5.6)	3 (0.7)	62 (14.9)

図 28 生存者健康調査結果

死没者調査

死因は健康管理手当の対象 11 疾病に精神疾患を加えた疾病に分類されている (図 29)。

死没者調査表

(単位: 人.%)

標本数	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)
	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害	障 害
197	1 (0.5)	2 (1.0)	70 (35.6)	3 (1.5)	29 (14.7)	23 (11.7)	23 (11.7)	-	11 (5.6)	-	3 (1.5)	-	22 (11.2)

図 29 死没者調査結果

死因のうち細胞増殖機能障害の 70 名は「白血病 9 名、胃癌 22 名、肝臓癌 7 名、肺癌 6 名、直腸癌 5 名、膵臓癌 3 名、子宮癌 3 名、皮膚癌 3 名、乳癌 2 名、食道癌 2 名、甲状腺癌 2 名、その他」と細分されている。

## 灰と雨に関する調査

調査対象の 309 人のうち、灰に関しては 266 人 (86.1%) が「灰をかぶった」、40 人 (12.9%) が「わからない」と回答した。

雨に関しては 179 人 (57.9%) が「黒い雨に濡れた」、110 人 (35.6%) が「黒い雨に濡れたかどうかわからない」と回答した (図 30)。

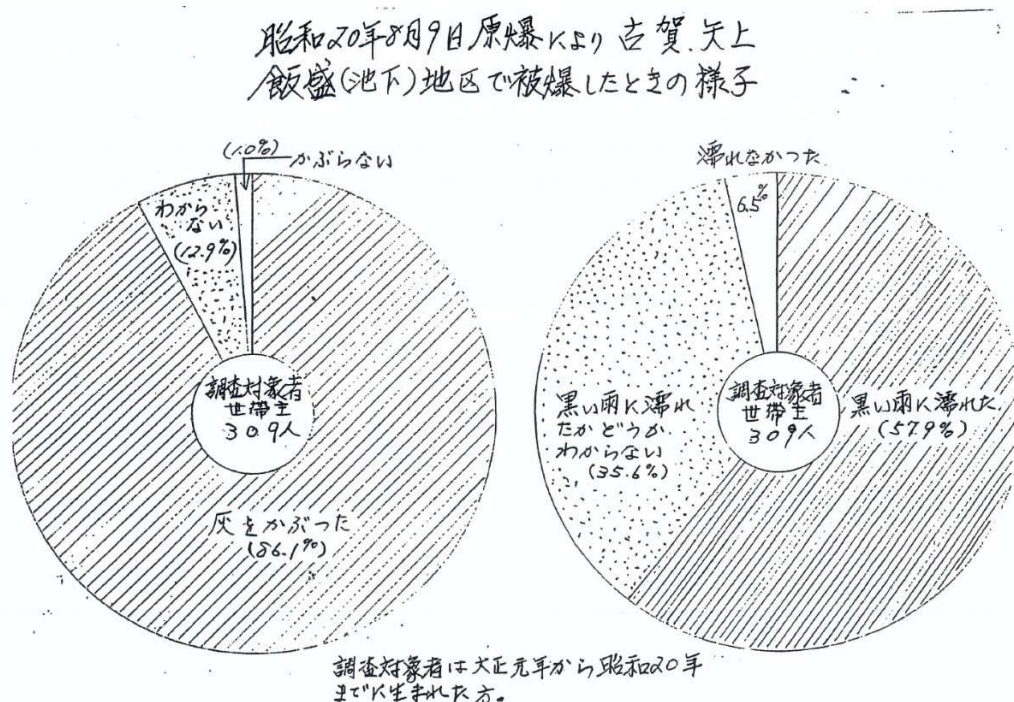


図 30 古賀、矢上、池下地区の灰と黒い雨に関する調査結果

長崎県被爆者手帳友の会の健康実態調査並びに死没者調査は調査対象を記憶が確かな 74 歳以下に限定し、生存者健康調査には有病率の高い 75 歳以上を対象から除くなど、バイアスを除く配慮がなされている。生存者健康調査、死没者調査結果は健康管理手当対象の 11 疾病別に分類されており、細胞増殖機能障害は白血病、癌の種類別にきちんと分類調査されている。灰、黒い雨に関する回答で、「灰をかぶった」が 86.1%、「黒い雨に濡れた」が 57.9%は非常に高率である。調査には被爆時年齢が 0 歳の者も含まれるため、「わからない」という回答が一定数含まれるのは当然といえる。この調査は古賀、矢上、池下地区を含めた東長崎地区に黒い雨が降ったことを示す客観的資料として貴重である。

### 喜々津村・大草村・伊木力村

喜々津（ききつ）村・大草（おおくさ）村・伊木力（いきりき）村は爆心地の北西に位置する（図 31）。



図 31 図 13 の拡大図 喜々津村・大草村・伊木力村  
マンハッタン調査団の測定地点は 40 カウント以上

表 1（再掲）に示すように、喜々津村・大草村・伊木力村の降雨体験割合は日見村、田結村と同等に高い。

(単位:件)

	茂木町	日見村	矢上村	戸石村	古賀村	式見村	三重村	深堀村	香焼村
総件数	1,581	392	785	791	501	616	500	648	266
黒い雨・雨に関する記述	10 0.6%	9 2.3%	42 5.4%	6 0.8%	43 8.6%	1 0.2%	2 0.4%	1 0.2%	0 0.0%

	伊王島村	村松村 子々川郷	村松村 西海郷	伊木力村	大草村	喜々津村	田結村		合計
総件数	166	50	112		533		84		7,025
黒い雨・雨に関する記述	0 0.0%	0 0.0%	1 0.9%	6	2	4	2		129 1.8%
				2.3%			2.4%		

表 1 被爆未指定地域の黒い雨・雨に関する記述と降雨体験割合

喜々津村の市布名（いちぬのみょう）での平成 11 年証言調査の証言 No.119 は「外に干していた兄の白いランニングシャツに降灰と少量の黒い雨が降り、

黒い斑点が残っていた。洗濯後、着用した」と具体的である。

市布名の隣の西川内（にしこのうち）の証言 No.122 の証言も同様である。「空が暗くなり、雨が降って、皆走って家に帰った。白いシミーズを着ていたのに、黒い雨の跡が一面に付いていた」。聞き取り調査でも西川内の T.H.（被爆時年齢 9 歳）は「ぼた雪のような灰がいっぱい降ってきて、道につもった。だいぶたって砂利道がわからないくらいに灰がつもった頃、大粒の雨が降ってきた。袖なしの白いシャツをきていて、腕やシャツにポツポツと黒いシミができた。雨がふってきたので、10m 位はなれた馬小屋にはいった。そこにしばらくいた。外にでたとき雨はやんでいた」と証言している。3 者の証言はいずれも着衣に黒い雨が印を残したことで共通している。

同じ西川内では ABCC の「雨」地点が記録されている。

喜々津村には体験記の証言もある。S.K.（被爆時年齢 19 歳）「西彼杵郡喜々津村の国民学校でのことである。演習から宿舎へ戻り次の準備をしていた。その時、「敵機襲来」の指示で廊下へ退避しようとした瞬間、青い閃光を感じ急いで伏せた。次いで運動場（営庭）へ駆けていると小雨がパラパラと降ってきた」

平成 11 年証言調査によれば、喜々津村に隣接する大草村、伊木力村にも「雨」に関する証言がある。伊木力村の佐瀬郷には長崎県市の被爆地域図に「黒い雨の降雨地帯」が記され、「黒い雨降雨地域 昭和 20.8.9 午後降雨」と註記されている。佐瀬郷には証言 No.123 「それから数分して琴ノ尾岳の上空の空が赤から真っ黒に変わり雷が成りましたのでこわく成り全員家の中に入りました。姉から夕がたききました雨が少々降ったそうです」とある。伊木力村、大草村の「雨」は、No.123 「雨が少々」、No.126 「パラパラと」、No.117 「ぽつんと」、No.129 「パラっと」、No.121 「長くは降らなかった」と表現が共通しており、通り雨のような小雨であったことがわかる。

マンハッタン調査団の測定で喜々津村でも長崎原爆由来の放射線が観測されている（図 32）。

2.3	道路横の地面			65	0.015
3.7	道路横の地面、東方向にしばらく下り坂。			54	0.012
4.1	道路横の地面、しばらく上り坂	3	5		0.030
5.0	小さな村	<b>古賀村</b>		140	0.044
6.0	東北へ向かう道路脇	3	4.5		0.025
7.1	村を通過した地点の道路脇	<b>喜々津村</b>		65	0.015
8.0	25度程度入り込んだ道路脇	<b>喜々津村</b>		68	0.016
9.0	両側が水田の道路脇			38	0.005
10.0	村外れにある両側が水田の道路脇			50	0.010

図 32 マンハッタン調査団 ロード1 (大村) (9/26) の測定結果

このように喜々津村、大草村、伊木力村には平成 11 年証言調査、被爆体験記、聞き取り調査と異なる調査で具体的な「雨」に関する証言があり、被爆地域図の「黒い雨地帯」、ABCC の「雨」地点があり、さらにマンハッタン調査団の測定結果という物的証拠が存在するのであるから、喜々津村、大草村、伊木力村において「雨」が降った客観的証拠があるといえる。

#### 村松村・三重村・式見村

村松村、三重村、式見村は爆心地の北西に位置する (図 33)。



図 33 図 13 の拡大図 村松村・三重村・式見村  
マンハッタン調査団の測定地点は 40 カウント以上

村松村、三重村は爆心地の北西 12km にある。12km 以内の地域が第二種健康診断特例区域に指定されている。村松村の子々川郷（ししかわごう）は昭和 34 年に時津町に編入されて現在に至っている。

平成 11 年証言調査の中の村松村の証言 No.115 は「家の前の谷門とばくふ（原文のまま）の雨がふりました」と短いですが、近接する子々川郷ではマンハッタン調査団により放射線が記録されている（図 34）。

3.2	水田の間の石畳			40	0.0055
4.0	村の中心の未舗装の道			48	0.0085
5.0	水田と丘の間の未舗装の道			43	0.007
6.1	水田と森の間の砂利道			40	0.0055
8.4	住宅前の未舗装の道			48	0.0085

村松村

図 34 マンハッタン調査団 ロード 8（琴海）（9/27）の測定結果

被爆地域図の三重村には「黒い雨降雨地域」があり、「昭和 20.8.9 午後 1 時」と記録されている。その近くの海上での証言 No.112「光を感じ、自分のすぐそばに爆弾が落ちたと思った。その後黒い雨が降り、雨にも濡れた」、No.113「腹一杯になったので（昼食を食べて）全部とした（吐いた）。逃げる時に黒い雨が降ってきた。ひどい下痢をして家にいた」という証言がある。

三重村の全域、式見村でマンハッタン調査団により放射線が記録されている（図 35）。

走行距離	測定地の説明	ガンマ線量	
		回/分	線量
	2.2マイル地点の分岐で左折、 同じ調査団が前日に通った道		
3.0	水田の間の未舗装の道	48	0.0085
4.0	山の中腹、森の砂利道	42	0.0065
5.2	山の反対側1/4を下った地点	68	0.016
6.4	山を1/2下った地点、片側は林、もう一方は砂利の土手	56	0.012
7.5	山のふもと、水田の間の砂利道沿い	40	0.0055
8.7	村の道	48	0.0085
10.2	水田の間の未舗装の道	52	0.010
12.0	村の中心地	62	0.014

式見村

三重村

図 35 マンハッタン調査団 ロード 7（三重）（9/28）の測定結果

式見村の東半分は第一種健康診断特例区域、西半分は第二種健康診断特例区域と分断されている。証言 No.111 で「ピカッとしてびっくりしてみんな外にとび出しました。きのご雲が見え、少ししたら空が真っ黒になりました。雨が降り出し、ビラが落ちて来ました。友達とビラをひろってまわりました」と雨が降った前後の様子がよく記憶されている。

式見村では ABCC の「雨」地点が記録されている。

このように村松村、三重村、式見村には平成 11 年証言調査、被爆体験記、聞き取り調査と異なる調査で具体的な「雨」に関する証言があり、被爆地域図の「黒い雨地帯」、ABCC の「雨」地点があり、さらにマンハッタン調査団の測定結果という物的証拠が存在するのであるから、村松村、三重村、式見村において「雨」が降った客観的証拠があるといえる。

#### 深堀村・香焼村・伊王島村

深堀村、香焼村、伊王島村は爆心地の南西に位置する（図 36）。



図 36 図 13 の拡大図 深堀村・香焼村・伊王島村  
マンハッタン調査団の測定地点は 40 カウント以上



平成 11 年証言調査で深堀村、香焼村、伊王島村での証言は少なく、深堀村の 1 件のみである。証言 No.114 「夜は長崎の空が真っ赤に燃え上がり、その後 2 日くらいは夜になると見えていました。雨も降りました」

しかし、深堀村の周囲には香焼島造船所沖合、土井首町、平山町と 3 ヲ所の ABCC の「雨」地点がある。

さらに、香焼島には 3 件の被爆体験記調査の証言がある。Y.S. (被爆時年齢 19 歳) は香焼島の川南造船所で被爆した。「原爆の破裂時に青白い閃光が工場内を照らしました。その後一時間ほどしてから空一ぱいに広がった原子雲 (その時は原爆によって雲ができたとは思っていなかった) が少量の雨を降らしました。これをパラ、パラッと受けました」と証言する。

同じ川南造船所で被爆した O.M. (被爆時年齢 15 歳) の証言は「避難しろ！という声で、慌てて作業場にいた学友たちと工場の外に出た。工場内の横穴に避難するまでの間に、グレーの入道雲のような雲がもくもくとわきでて、にわか雨のように雨が降ってきた。自分が一番最後から横穴にはいっていくと、友人の A さんから「早よ、拭くかんね。」と言われ、ふつうの雨粒のつもりで体を拭こうとすると、拭いても拭いても油のようにぬるっとして、ねずみ色の点々が残り、きれいに拭き取れなかった」と具体的で迫真性に富む。

体験記調査に為石村 (ためしむら) で被爆した N.M. (被爆時年齢 17 歳) の証言がある。

「大阪の 22 部隊で編成 1 カ月の教育演習の後、部隊の目的地である長崎へ移動、近づく本土決戦に備へ五島列島がはるかど良く見える長崎県為石町に陣地構築の作業に入った」

「長崎市上空で何か白い物がふらふらと落ちて行く、B29 が落としたのかと思った瞬間、突然強烈な稲妻の鋭い光、熱風、地響、私は●時倒れたが、直ちに部隊事務室に入った。全員驚愕、長崎方面はまっ黒な雲煙、これはただ事ではない。しばらくして天を突く黒い雨が降って来た」

「広島に次ぐ長崎にも新型爆弾落下、市内全滅死傷者多数、直ちに長崎市へ救援と救護活動に出動せよ」鋭い黒い雨をついて為石地区を出発。突中部隊命令が入り雨の為移動不可能と長崎市内へは今入れないの●時待機せよとの連

絡」

雨に関する証言は具体的で迫真性に富む。為石村は深堀村のさらに南、爆心地から 12km 圏外で野母半島の東に位置し橘湾に臨む。為石村はその後三和町、長崎市に合併され、現在の住所は長崎市為石町となっている。為石村は野母半島の東側にあるので五島列島は見えない。ただ一ヶ所、為石村の最も西、野母半島の中央部にある元宮公園からは五島列島を望むことができる（図 37）。



図 37 為石村

N.M.が雨にあった場所は元宮公園もしくはその近傍と考えられる。そして、元宮公園のすぐそば、国道 499 号線と為石町への分岐点はマンハッタン調査団が野母半島で最も高い線量を観測した地点でもある。

走行距離	測定地の説明	ガンマ線量	
		回/分	線量
	造船所の反対側で走行距離は277.9を表示		
279.7	瓜畑	46	0.0080
280.8	橋の端	48	0.0081
283.3	内陸に向かう郊外	37	0.0041
285.7	北西方向と南方向の道の交差点	61	0.0130
286.5	町の端	35	0.0040

図 38 マンハッタン調査団 ロード 10 (9/29) の測定結果

マンハッタン調査団による放射線の測定記録は、体験記調査の「雨」の証言を裏付けるものである。

平成 11 年証言調査で深堀村、香焼村、伊王島村での証言は少ないが、香焼島には体験記調査での証言があり、その沖合および近傍では ABCC の MSQ 調査で「雨」地点が記録されている。さらに、深堀村より爆心地から遠い元宮公園付近で体験記での「雨」証言とマンハッタン調査団による放射線測定結果が残されている。

このように深堀村、香焼村、伊王島村には平成 11 年証言調査、被爆体験記の「雨」に関する証言、ABCC の「雨」地点があり、さらに近傍でマンハッタン調査団の測定結果という物的証拠が存在するのであるから、深堀村、香焼村、伊王島村において「雨」が降った客観的証拠があるといえる。

## 茂木町

茂木町は爆心地の東南に位置する。平成 11 年証言調査には茂木町で「雨」に遭った証言が 10 件ある。証言 No.1 は「長いこと空を眺めていたら雨が降り出して、よく見たら黒くスミのような雨が、口をあんぐりあけていたので、雨が口に入ったのをよく覚えている」と具体的である。

証言 No.8 は「午後 1 時過ぎ頃と思いますけど、雨が降って来ました。私は石運びをして、気づくと黒い雨でした。手も汚れ、来ていたシャツも黒く汚れました」と証言する。シャツが黒く汚れたという証言は日見村や喜々津村での「雨」証言でもみられる。

証言 No.9 は飯香浦郷（いかのうらごう）の「こしき岩」の下での体験である。「長崎の方を見たら、キノコ雲が出て、自分の頭上の空も今まで見たことのない真っ黒な空になっていた。そして灰と紙、雨も降ってきた」

同じ「こしき岩」での「雨」証言が被爆体験記調査の中にもある。M.S.（被爆時年齢 13 歳）「爆心地より 6K の長崎市田手原のこしき岩山上で長崎県立工業学校（一年生）より勤労働員作業中、上半身ランニング姿で閃光と爆風の洗礼を受けたものです。作業を指導中の兵隊の号令により、その場に伏せ、しばらくして周囲の様子を見渡したところ、北側の長崎市方面上空に黒煙が多数あがっており、緊急に作業を中止し解散、下山した訳ですが、上空が暗くなりパラパラと雨が落ちて来た記憶があります」

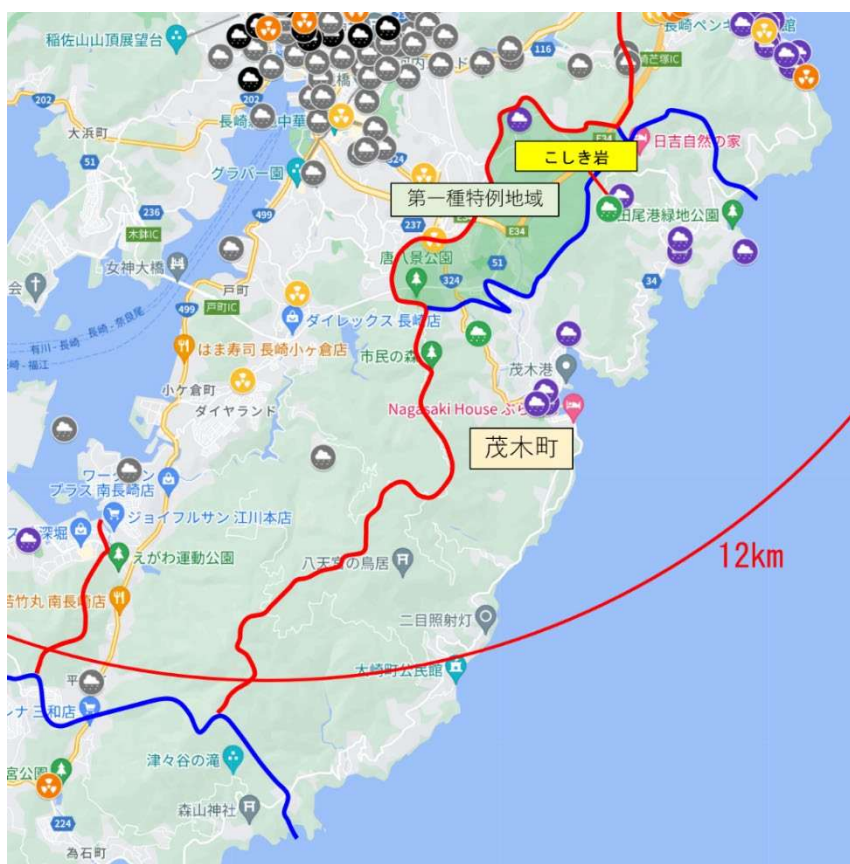


図 39 図 13 の拡大図 茂木町  
マンハッタン調査団の測定地点は 40 カウント以上

茂木町でもマンハッタン調査団による放射線の測定結果が残されている。ビーチホテルとはマンハッタン調査団が長崎に上陸した後宿泊した茂木のホテルの名称である。

スピード メーター 値	測定地の説明	ガンマ線量	
		回/分	線量
561.8	浦上川と線路に沿った南北に走る道の交差点	30	0.002
562.0	ビーチホテルへの道	45	0.008
563.1	ビーチホテルへの道	41	0.006
564.1	ビーチホテルへの道 <b>茂木町</b>	46	0.008
565.0	ビーチホテルへの道	30	0.002

図 40 マンハッタン調査団 ロード 11 (茂木) (9/24) の測定結果

このように茂木町には平成 11 年証言調査、被爆体験記の「雨」に関する証言、マンハッタン調査団の測定結果という物的証拠が存在するのであるから、茂木町において「雨」が降った客観的証拠があるといえる。

### 第三章 結論

国の「西山地区以外で降雨があったとの客観的な記録はない」のは長崎原爆戦災誌が刊行された昭和 60 年時点の国の主張である。

国の主張をすべて合わせても図 41 の範囲にとどまる。被爆未指定地域の「雨」についての科学的調査は行われておらず、昭和 60 年時点で「西山地区以外で降雨があったとの客観的な記録はない」からとって、被爆未指定地域に「黒い雨」が降らなかった証明にはならない。

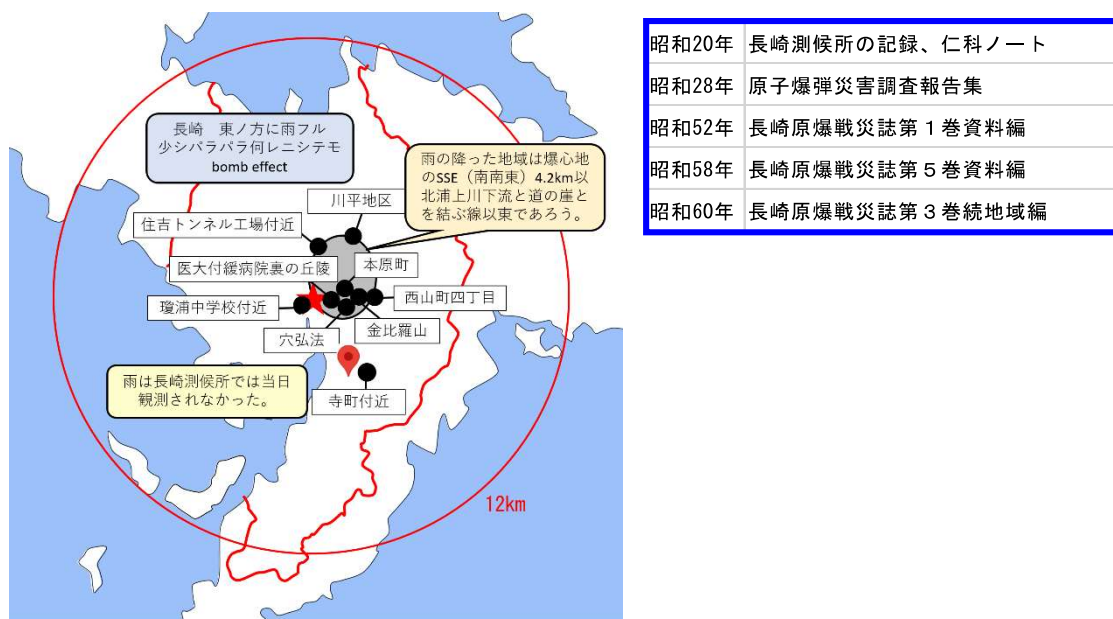
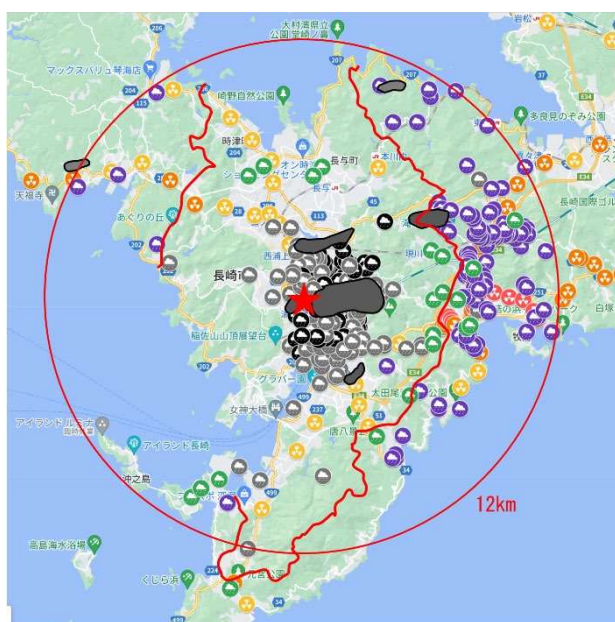


図 41 長崎の「黒い雨」についての国の主張

これに対して昭和 60 年以降には昭和 61 年「原爆被爆地域図(初版)」が作成され、平成 23 年には「ABCC の MSQ 調査による雨地点」が放影研から公表された。令和 4 年には「長崎の黒い雨等に関する専門家会議」が平成 11 年の「原子爆弾被爆未指定地域証言調査」を分析し報告を取りまとめ、令和 6 年には「被爆体験記調査」が行われた。さらに平成 24 年には「マンハッタン調査団の放射線測定データ」が発見され、被爆未指定地域を含めた長崎の広い範囲に長崎原爆の残留放射線が確認された。また、昭和 62 年の「間の瀬住民の聞き取り調査」、「東長崎地区黒い雨に関する調査」、平成 23 年の長崎県保険医協会による聞き取り調査もある。これらの調査結果をまとめると図 42 のようになる。



昭和20年	長崎測候所の記録、仁科ノート
昭和28年	原子爆弾災害調査報告集
昭和52年	長崎原爆戦災誌第1巻資料編
昭和58年	長崎原爆戦災誌第5巻資料編
昭和60年	長崎原爆戦災誌第3巻続地域編
昭和61年	原爆被爆地域図(初版)
昭和62年	間の瀬住民のアンケート調査
昭和62年	東長崎地区の黒い雨調査
平成11年	原子爆弾被爆未指定地域証言調査
平成23年	長崎県保険医協会による聞き取り調査
平成23年	ABCCのMSQ調査による雨地点
平成24年	マンハッタン調査団放射線測定データ
令和4年	長崎の黒い雨等に関する専門家会議
令和6年	被爆体験記調査

図 42 昭和 60 年以降に行われた長崎の「黒い雨」についての調査結果

昭和 60 年以前の調査結果をもって、昭和 60 年以降に行われた調査結果を否定することはできない。

また、第二章「各論」で述べたように、長崎の被爆未指定地域の各地区で長崎原爆による「黒い雨」降ったことの客観的記録が存在することが確認された。

被爆体験者は被爆者である。

平成11年証言集抜粋

1	茂木町	本郷		長いこと空を眺めていたら雨が降り出して、よく見たら黒くスミのような雨が、口をあんぐりあけていたので、雨が口に入ったのをよく覚えている。
2	茂木町	田手原名		黒い雨が降っていると言われたので、私も防空壕の入り口で黒い雨を見ました。雨がポツポツと降り、長崎の空は赤々としていた。
3	茂木町	河内郷		しばらくして外に出ると、木の葉と一緒に小石まぎりの雨のようなものが降ってきた。
4	茂木町	飯香浦郷		姉の話だと午後になって黒い雨の様なものがポトポト降って来て、カンテン草、フ、色紙、木ぎれ等が沢山灰と一緒に飛んできたという。
5	茂木町	本郷		防空壕より自宅へ帰った後、夕焼けのような空から黒い雨が降った。
6	茂木町	北浦名		爆風で飛ばされた時に地面に伏せていて、顔を上げていっときしたら黒い雨が降ってきたようでした。
7	茂木町	本郷	河内	兄さんたちが、母親が背中に背負ってピワ山の小屋に逃げた、そのあとに黒い雨が降ったよと話していました。
8	茂木町	太田尾名	南方向の海岸	午後1時過ぎ頃と思いますけど、雨が降って来ました。私は石運びをして、気づくと黒い雨でした。手も汚れ、来ていたシャツも黒く汚れました。予科練生の方が広島に落ちた新型爆弾の時も黒い雨が降ったそうだよ、同じ黒い雨は長崎も一緒だと知らせてくれました。
9	茂木町	飯香浦郷	こしき岩の下	長崎の方を見たら、キノコ雲が出て、自分の頭上の空も今まで見たことのない真っ黒な空になっていた。そして灰と紙、雨も降ってきた。
10	茂木町	飯香浦郷		家の前には竹やぶがあり、その竹が一瞬のうちになぎ倒されたようになったそうです。それから黒い雨が降って来たそうです。
11	日見村	宿名	今の水族館の田	しばらくすると空は黒く曇り、太陽は真っ赤になり、ちらちら雨が降り落ちてくる。雨は身体に付くと黒く汚れていた。
12	日見村		日見小学校	晴天であったが投下後しばらくして原子雲が浮き上がり、少量であったが雨が降ってきたのを覚えている。
13	日見村	宿名		暫くすると、黒っぽい雨が降り、太陽が曇って夕日の様でした。
14	日見村	網場の海		日見トンネルの方向より燃えカス等がどんどん飛んできた記憶がある。雨も降った。
15	日見村	網場名		帰宅途中やがて油のような黒い雨が降って来て、白いシャツに黒い斑点を作った。
16	日見村	網場名	字岡	大人たちから防空壕にいるよう指示があり、そのうち雨（真っ黒い雨）が降ってきたような記憶が残っています。
17	日見村	網場名		午後4時と思います。飛んでいた落下傘も戸石方面の山々の中に消えた様です。その時刻、時おり霧雨（黒い雨）がちらつきました。
18	日見村	網場名		外で遊んでいたら黒い雨が降ってきた。
19	日見村	網場名	493-2軍需工場	黒い燃えた後のゴミみたいな物がいっぱい落ちて来ました。雨も降りました。
20	矢上村	町名		数時間後、茶色の砂塵が屋根につもり、黒っぽい雨がパラパラと降ってきた。
21	矢上村	瀬古名		空の色は柿色いっぱいでした。後で暗くなったような気がします。雨も降った様でした。
22	矢上村	東名		午後になって雨が降ったようだ。防空壕を出てみると、サツマイモの葉に黄色い砂が積もっていた。
23	矢上村	平間名		太陽が真赤になり、恐ろしくなり、又、雨も降って来ました。
24	矢上村	町名		雨（黒い雨）がひどく降った。
25	矢上村	間の瀬	新田頭	紙切れのような物が降ってきたような記憶があります。姉や兄達に聞くと、雨も降ったそうです。

平成11年証言集抜粋

26	矢上村	間の瀬		しばらくしたら、黒い空になり雨とともにゴミのような紙切れ等が飛んできました。もう恐ろしくて恐ろしくて大きな声でお母さんと呼んでいた。
27	矢上村	平間名		しばらくして黒い灰の様な物が降って来たそうです。それから少し雨が降ったそうです。
28	矢上村	平間名		三山の上空で3つのパラシュートが飛び出しました。そのうちの1つが爆発したのです。一瞬目はくらみ見えなくなりました。その後15分位してからどしゃ降りの雨が10分位だったと思います。降りました。
29	矢上村	平間名		びっくりして母と二人ですぐ家に帰ったら黒い雨が降った。しばらくするとお金が空から降ってきた。10銭、50銭紙幣がほこり（灰）と同時に降ってきた。雨も夕立のようにサーッと降って、しばらくすると止んだ。
30	矢上村	平間名		暫くして紙の燃えがらが西側になる長崎市内から一面に飛んできた。更に黒い雨も降って来たのでおじいちゃんから早く家の中にいるように叱られたのであわてて逃げ込んだ
31	矢上村	間の瀬		大きい木の下に隠れていたら、空が真っ黒になり、何か白い物とか黒い物が空から降って来て、それから雨が降って来たので恐ろしくなり、急いで家に帰ったそうです。
32	矢上村	平間名		浦上方面より火災の燃えカスや灰の様な埃が飛んで来て頭や顔を汚した。後で父親から黒い雨の様な物が降ったと聞かされた。
33	矢上村	町名		雨が外に立って見ていましたのでパラッと降って来ました。大粒の黒い雨でした。洋服が黒く濡れていたの着替えしました。
34	矢上村	間の瀬		一瞬電流が背中に走り、黒い雨が降り、庭に面したガラス・障子は割れ、襖は家の奥へと飛んでいったそうです。姉は友達と庭で遊んで、頭が真っ黒になったと聞いた。
35	矢上村	町名		黒い雨（大粒のパラパラ）が降って来て、母はその時濡れてすぐ着替えたそうだ。
36	矢上村			長崎の方を見たらゴミが飛んできた。茶色の雨が降った。
37	矢上村			1時間くらいたったのでしょうか、空からぼつぼつと黒い雨が私たちの頭上に降って来たのです。いきなりの雨に母も私も何も体を覆う物もなく、ただただ家路を急ぐだけでした。
38	矢上村	間の瀬		まもなく黒い雨と黒い灰が同時に信じられないほど空から降って来た。 (39と同地点)
39	矢上村	間の瀬		まもなく黒い雨と黒い灰が同時に信じられないほど空から降って来た。 (38と同地点)
40	矢上村	間の瀬		私は直後、空を見たら黒い雨と黒い灰が降って来た。紙くずもあった。
41	矢上村	田中名	矢次郎 神社	中尾岳の空は真っ赤にやけ、燃え上がる炎を見た時です、燃えた紙屑や灰などが飛んで来て、みるみる灰の町になったのを見ていた時、今度は黒い雨が降って来た
42	矢上村	田中名	神社	中尾岳の空は真っ赤になり、燃えた紙くずがヒラヒラと降って、黒い雨も降って来たので、恐ろしくてとにかく家に走って帰った。
43	矢上村	間の瀬		燃えカス混じりの様な真っ黒い灰と燃えカスの紙屑がばらばらと落ちてきたり、太陽が真っ赤に燃えているようになりました。一瞬の間黒い雨も降ったと、父母、兄姉から聞いております。
44	矢上村	平野名		空は真っ黒で真上に赤い爆弾みたいなものが見え、空中にはお金とか紙とかいろんな物が飛び交い、南瓜の葉には砂の雨が積もり始めたので、あわてて三人で家の側の防空壕に逃げ込んだ。
45	矢上村	平間名	新田頭	間もなく空が赤暗くなってきた、赤黒い煙がもくもくと上がり、黒い雨や灰が降って来た。



平成11年証言集抜粋

46	矢上村	間の瀬		時間的にどの位後かよく覚えていないが、その日雨が降った。ずっと後になって年寄りたちがその時降った雨は灰で汚れて黒かったと話していた。
47	矢上村	平野名		空は暗くなり黒い雨が降って来た。それからというものは爆風により空から紙屑やゴミが飛んでくる飛んでくる、ものすごかった。
48	矢上村	田中名		空が黒い雲におおわれ、暗くなりあまりにも恐ろしくなり、急いで家に帰る途中、黒い灰や焼け残りの書類等いろんな物が風に流されて飛んで降って来た。それにまた雨まで降って来たので雨に濡れて家に帰った。
49	矢上村	間の瀬		長崎の空が煙でもくもくと上がり、太陽が真っ赤になり、梅干しみたいになりました。するとまもなく黒い雨と黒い灰が同時に空から降って来たのです。
50	矢上村	東名		しばらくし、紙切れ等が飛んでき、暗くなり、雨が降り始めた。
51	矢上村	田中名		何日か経って黒い雨が降って恐かったことを覚えている。
52	矢上村	東名		真昼というのに太陽は夕日のように赤く染まっていた。その後雨が降って来た。濡れた服を着替えたのを覚えている。
53	矢上村	今の材木市場		太陽は真っ赤にふらふら揺れ、空は真っ黒、暗くなるし雨も降り出し、紙屑類は飛んでくるし、恐かった。
54	矢上村	間の瀬		空は暗くなって来て、お日様は真っ赤に焼けてまもなく雨が降って来ました。やがて長崎の方からいろいろな物が飛んできました。
55	矢上村	平間名		周囲がだんだんとうす暗くなり、太陽を見ても赤く見えるだけでまぶしくありませんでした。それから空をみていると紙の燃えカスや灰の様な粉など降り出し、その後激しい雨、風になったことを今も覚えております。
56	矢上村	平間名		慌てて外へ飛び出してみると、それまで晴天で明るかった空がおぼろ月のようになっていました。その後、黒い雨が降り出し、燃えかけの紙くずの様な物が雪のように降って来ました。
57	矢上村	平間名	間の瀬/ 滝の観音	日輪もぼんやりうす暗い空からポツポツと降って来た雨を避けて玄関の軒下に集まっていた。その目の前を三菱の人たちが白いワイシャツの肩や背中に黒い雨のシミをポツポツと付け、目を引きつらせ無言で行き来していた姿を忘れない。私はその雨を爆風で空高く舞い上がった焼け跡の灰を含んだ雨と思っていた。
58	矢上村	平野名	土手(開墾中)	紙切れや燃えた灰がたくさん降って来ました。とにかく早く山の方へ行くと言われて山へ行く途中、空が真っ暗くなって大雨が降って来て、みんなびしょ濡れになって山へ行き、弁当を食べて雨が止むのを待って帰りました。
59	矢上村	柿道		もう忘れましたが、何日か経ってから真っ黒い雨が降りました。
60	矢上村	柿道		山に松脂を一人で取りに行き、黒い雨の様な物が降って来ました。とっても恐ろしかった。
61	矢上村	東名	字長龍寺 の畑	焼けこげた新聞紙の様な物がヒラヒラ落ちてきた。誰かがお金も落ちてくるかもしれないと言ったので拾って回った。よごれた雨も降って来た。
62	戸石村	里名		灰や紙くずが飛んで来ました。その後、黒い雨が降って来ました。
63	戸石村	上戸石名		午後2時頃灰と紙くずが飛んで来ました。その後、黒い雨が降って来ました。
64	戸石村	上戸石名	水の落口	一番高い山で松の油を取っていました。その時、光や音、真っ黒い雨が降ってびっくりして、のどが渴いたので水を飲んで下へ下へと降りてきた。
65	戸石村	里名		長崎の方からは紙くずや真っ黒になった燃えカスや真っ黒な雨が降って来て、辺りは真昼だったのですが、まるで夕方様でした。

平成11年証言集抜粋

66	戸石村	岡名	戸石防空 監視所	長崎上空、飯盛上空へと真っ黒く夜の様な空模様になり、にわか雨が降った。周囲はあらゆる植物の葉に灰色の雪でも降ったかのような景色に変化した。
67	牧島村			またたく間に東長崎の上空一帯は真っ黒となり、太陽の姿も隠れていた。にわか雨の様な通り雨が降り、その後、茶色に変色して太陽の姿が火の玉でも落ちてくるかのように感じたと同時にものすごい灰を浴びたのを覚えている。
68	古賀村	木場名		周囲が夜のように暗くなり、雨が降った
69	古賀村	木場名		午後2時頃、黒っぽい雨も少し降ったようでした。
70	古賀村	木場名		ベタベタした雨が降って来ました。おじが「木の下にかがめ」と言ったので近くの柿の木の下に行きました。
71	矢上村		今の支所 の道隣	真っ赤な光（太陽）と空はどす黒くなり、黒い雨が降り、燃えカス、紙片などが飛んで来ました。恐ろしくなり、自分の家へ向かい帰りました。
72	古賀村	木場名		爆風で障子がガタガタと揺れて30分～1時間後に外が暗くなり、外に出てみると、今思うと太陽が火玉のようで黒い雨が少し降ったようで、その後、紙の燃えた灰が落ちたようでした。
73	古賀村	松原名	上床	午後からは雨が降り続き、その中を私に会うために父が歩いて上って来ました。
74	古賀村	松原名		外に出たら空は真っ黒くなり、雨が降り出した。しばらくすると西空に入道雲のようなものがもくもくと上がっていた。
75	古賀村	木場名		辺りは夜のように暗くなり、公民館より帰る途中の兄の頭の上に雨が小々降ったそうです。その時太陽が真っ赤になり、俗にいう火の玉のように見えたと言います。
76	古賀村	中里名	国道→ 船石の道	解除になり、防空壕より出てみたら黒い雨が降りました。
77	古賀村	船石	千束野ク ラブ	外へ出ますと、黒い雲の様な形がモクモクと立ち浮かんでいて、辺りは暗くなって来て、雨もパラパラと降って濡れて帰りました。
78	古賀村	松原名		しばらくして空から雪のように灰が降って来て、屋根や草木の葉に積もった。又お金の燃えカスや新聞、雑誌等の燃えカスが降って来た。又、黒い雨が降って来た。
79	古賀村	中里名		空は曇ってしまって、黒色の小雨の様なものが顔に当たり、やがて紙等の燃えた灰が大量に舞い降りて来た。
80	古賀村			霧雨のような雨が降り、手ぬぐいに黒い点がつき、驚いた。
81	古賀村	中里名	田んぼ	目と鼻をふさぎ、草むらに身を伏せたら大粒の黒い雨が降って来たので、山の中に逃げ込んだら、山の中に名前も分からない通りがかりの中年のおじさんがいた。そのおじさんと数十分山の中にいた。
82	古賀村	中里名		長崎市の上空が黒くなり、空から黒い雨白い雨が降って来て、柿の葉に黒く積もりました。
83	古賀村	向名		しばらくすると空は昼過ぎというのに暗くなりだし、お日様が月を赤くしたように見えだしました。その後、雨が降り出し空からちりのようなものが雨と一緒に舞い降りて来ました。
84	古賀村	松原名	上床	お昼に家族の者が畑から帰って来て、飛んで来た紙切れを見て、長崎の方じゃなかろうかと言っておりました、大粒の黒い雨もポトポトと落ちて来ました。
85	古賀村	松原名		爆風が吹いて二人共に倒された。しばらくして空が真っ暗くなり、大粒の黒い雨が降って来たので家に帰った。

平成11年証言集抜粋

86	古賀村	中里名	中野1425 芋畑	長崎方面を見ると空が真っ黒い雲で覆われ、次第に赤黒くなり、私たちのいるイモ畑の真上まで赤黒くなり、そのうちに雨が降り出してきた。雨はしばらくして止んだ
87	古賀村	向名		少ししてから飛行機の行ったところを見ていたら、丸い雲ができ、中は赤くだんだん雲が広がり、雨も少し降って来ました。
88	古賀村	中里名	下郷	何が起こったのかわからず、顔を上げ空（西の方）を見ると入道雲の様なのがモクモクと上がっていたのを鮮明に覚えています。その後、太陽が真っ黒く見えました。皆帰りだしたので、私も家に帰りました。帰る途中に真っ暗くなり、雨が降り出しました。
89	古賀村	向名		西の長崎上空を見ると、雲が空一面を覆い、真っ黒になった。そのうち、パラパラと真っ黒い雨と燃えカスみたいのが降って来たので、近所にあった防空壕に避難した。
90	古賀村	向名		空は曇り、太陽は真っ赤で丸く、雨も落ちた。
91	古賀村	中里名	四手山 西の山	空はだんだんと雲と煙に覆われて暗くなった。雨も降った。
92	古賀村	木場名	中河内ク ラブ	矢上方面の山野谷間から黒い入道雲がもくもくと上がり一瞬のうちに空がうす暗くなったと思うや焼けた紙が空一面にヒラヒラと舞うや、その時雨粒が降って来た。
93	古賀村	中里名	裏山	キノコ雲を見たり、灰が飛んできたり、黒い雨が降ったりしました。
94	古賀村	木場名	中川内青 年クラブ 今の集会 所	白いラッカサンが私たちのいる所の上空にフワリフワリと飛んで来て田結の方へ行った。当地の消防団の方がアメリカ人がラッカサンから降りて来るぞと言って前の道を行かれたのを覚えている。そして私たちは家に帰った。途中で雨が降って来た。
95	古賀村	木場名	中河内ク ラブ	家に帰る途中雨も降った。
96	古賀村	木場名	中河内青 年クラブ	北西部の方に大きな煙の玉が上がり、やがて曇って薄暗くなり、大粒の雨が少し降りました。
97	古賀村	向名		落下傘がふわふわと落ちながら東の方へ飛んで行きました。急に曇空になり、大粒の雨が少し降りましたが、やがてもとの青空になりました。
98	古賀村	松原名	墓所	西の方の空は真っ黒に煙が拡がり、大空より、黒い雨や黒い雪みたいな（大橋兵器の書類）焼け残りや、真っ黒に焼けた灰がヒラヒラと西の方より空が暗くなるように舞い降りて来ました。
99	古賀村	中里名		黒い雨も降りました。（100と同地点）
100	古賀村	中里名		黒い雨も降りました。（99と同地点）
101	古賀村	松原名		空の太陽は真っ赤になり、雨のような物、焦げた紙切れなど降って来た。
102	古賀村	松原名		燃えカスや紙切れがたくさん飛んで来て、雨が降り、太陽が原爆雲で真っ赤に見えた。
103	古賀村	木場名	字上座	頭にかぶっていた手ぬぐいがしっとりするほど、小雨もありました。
104	古賀村	九重里	神社	長崎の方がピカリと光り、真っ黒い空になって、太陽が真っ赤になり、爆風が大きい木を倒すみたいになり、着物の燃えカスや、地図などが飛んで来て、黒い雨が降って来た。
105	古賀村	向名		午後は赤い太陽で恐かった。紙屑の灰が落ちて来たので拾って遊んだ。夕方は黒い雨が降り出した。
106	古賀村	松原名		しばらくすると辺り一面にノート、本、紙幣、等々燃えかけの紙片が落ちて来た。その数時間後に真っ黒い雨が降って来た。
107	古賀村	向名	古賀国民 学校	夕方小雨の降った記憶がある。

平成11年証言集抜粋

108	古賀村	中里名		閃光が走り、空が真っ暗になった後、黒い雨が降ったことも覚えています。
109	古賀村	松原名	上床	雨が降って来て空が真っ黒になりました。黒い雨と灰が飛んで来て、今まで経験した事のない爆弾が落ちたのを感じました。
110	古賀村	松原名		防空壕から出てみたら、空が真っ黒になり、灰が降り、雨も降って大変だったそうです。
111	式見村	田舎郷		キノコ雲が見え、少ししたら空が真っ黒になりました。雨が降り出し、ビラが落ちて来ました。
112	三重村		三重浜の沖	光を感じ、自分のすぐそばに爆弾が落ちたと思った。その後黒い雨が降り、雨にも濡れた。
113	三重村			逃げる時に黒い雨が降って来た。
114	深堀村		本町	夜は長崎の空が真っ赤に燃え上がり、その後も2日くらいは夜になると見えていました。雨も降りました。
115	村松村			家の前の谷門を爆風の雨が降りました。
116	伊木力村	野川内郷		空を見上げたら黒い雲がモクモク上がり、しばらくして黒い雨が降ったので、家の中に隠れた。
117	伊木力村	舟津郷		長崎の方を見ると赤黒い雲がモクモクと立っていました。まもなく黒い雲が広がり、夕方のように暗くなり、雨がぼつんぼつんと降って来ました。
118	伊木力村	舟津郷		空が夕方のように黒くなって来たかと思うと、空から雨がパラパラ降り、灰も降ってきたように思う。
119	喜々津村	市布名		外に干していた兄の白いランニングシャツに降灰と少量の黒い雨が降り、黒い斑点が残っていた。洗濯後、着用した。
120	喜々津村	中里名	今の河川道路	翌日以後、降雨は黒かった。
121	大草村	西園名		雨や灰が降り、上半身裸で濡れました。長くは降らなかった。
122	喜々津村	西川内	源八山	空が暗くなり、雨が降って、皆走って家に帰った。白いシミズを着ていたのに、黒い雨の跡が一面に付いていた。
123	伊木力村	佐瀬郷		姉が夕方来ましたが、雨が少々降ったそうです。
124	喜々津村	市布名	大草駅で下車	何分かしてから紙の燃えた灰がまるで黒い綿雪のように西方から降って来た（多量に）その後、大粒の雨が少量降って来た。
125	伊木力村	野川内郷		厚い雲がかかってき、外も家の中も真っ暗になり、アラレの様なものがバラバラと降って来ました。
126	伊木力村	野川内郷		厚い雲が出、外が真っ暗になり（夜みたいな状態）アラレみたいなものがバラバラと落ちて来ました。
127	田結村	池下名		外に出て長崎の方を見たら、焼けた紙屑や落下傘や黒い雨や灰が降って、西の方から東の方に飛んで来ました。（128と同地点）
128	田結村	池下名		外に出て長崎の方を見たら、焼けた紙屑や落下傘や黒い雨や灰が降って、西の方から東の方に飛んで来ました。（129と同地点）
129	大草村	元釜名		裏山の空が赤々と焼け間も無く一変し、黒雲が垂れ下がり、黒く焼け焦げた紙屑みたいなものが小粒の水滴と一緒にパラパラと落ち始めたのです。

## 平成23年長崎県保険医協会聞き取り調査

### ① 間の瀬（まのせ） 矢上村

#### S. T. 男性 被爆時年齢 8 歳

原爆投下時、八峰の自宅から 400～600mはなれたサツマイモ畑で妹と友人との 3 人で農作業中だった。長崎市の方角がぴかっと光って熱くて逃げた。爆風がきた。あっという間に空が真っ黒になって、ゴミがいっぱい降ってきた。自宅に帰りついた頃、夕立のような雨が降ってきて濡れた。それほど強い雨ではなかった。自宅は爆風でガラスがわれ、入れるような状態ではなかった。

父は東望の浜の役場に奉仕にいていた。父、母、姉、妹との 4 人家族。母は翌日長崎市内に入った。9 月以降に、母と姉に軽度の脱毛あり。自身は坊主頭だったこともあり、脱毛があったかどうか記憶がない。父の脱毛の記憶もない。

#### M. Y. 男性 被爆時年齢 9 歳

母、兄弟は戦時中に亡くなり、当時祖母と父との 3 人暮らし。原爆投下時は新田頭の自宅にいた。爆風で建具が倒れた。急いで 1 Km ほど離れた従兄弟の家に向かった。その途中で足をすべらせて崖から転落、腰を強打し、動けなくなった。その時に雨が降ってきて、びっしょり濡れた。その後にゴミがいっぱい降ってきた。雨が先かゴミが先かははっきりしない。雨の色は覚えていない。自力で崖を登り、従兄弟の家についたときには雨はあがっていた。地面は雨で濡れていた。

その後 1 ヶ月間、腰が痛くて動けずに自宅でねていた。医者にはかかっていない。脱毛なし。父、祖母にも脱毛なし。

#### M. F. 男性 被爆時年齢 11 歳

原爆投下時、畔別当と新田頭との境の山腹にいた。空からゴミと雨が降ってきて、カタシの木の下にかがんでいた。雨は 10 分かそこいらの通り雨だった。家族は 7～8 人。1 年後に本人と姉に軽度の脱毛があった。

#### N. M. 女性 被爆時年齢 10 歳

学校（夏休み中であつたが、男子は普賢山に松脂を取りに、女子は矢上小学校にいていた）からの帰り、矢上の馬場付近で被爆。地面に伏せた。その後急いで自宅に帰った。自宅までは子供の足で約 1 時間。帰る途中で雨が降って雨に少し濡れた。ひどくは降らなかった。自宅に帰ったときには雨はやんでいた。

被爆の年には脱毛は認めなかった。父と母も脱毛は認めなかった。数年後、娘時代に軽度の脱毛を認め、諏訪神社の下の皮膚科にかよった。

## 平成23年長崎県保険医協会聞き取り調査

### T. T. 男性 被爆時年齢 8 歳

原爆投下時、新田頭の自宅にいた。投下と同時に山が爆風で揺れた。原爆投下後ゴミが降ってきて、間もなく、にわか雨が降った。雨が降っていた時間は 30 分位か、正確には覚えていない。自身は雨には濡れなかったが、兄（被爆時年齢 14 歳）は水田で農作業中であり、雨に濡れた。世帯は、父、母、姉、兄、姪、翌々日には飽の浦にいた弟が沖縄にいた仲間と一緒に疎開してきて、8 人で暮らした。父は翌日長崎市内に入った。9 月以降に、本人、兄、母、姉に軽度の脱毛あり（毛が薄くなる程度）、父は地肌がみえるほどの脱毛あり。弟と沖縄にいた仲間の脱毛は覚えていない。父はその後体調を崩し、寝たり起きたりの生活で、原因は不明のまま、7 年後、50 歳代で死亡した。

### K. H. 男性 被爆時年齢 16 歳

長崎市内西町の寮で被爆。寮が全壊したため、翌日より間の瀬の本家（新田頭）に帰った。以後、本家にて過ごす。祖母、父、母、姉、妹、兄嫁との 7 人家族。本人も含め、いずれも脱毛を認めず。生活用水は川の水。被爆 10 日後に原因不明に具合が悪くなって寝込み、10 日後に回復した。

### N. F 男性 被爆時年齢 11 歳

原爆投下時、畦別当の畑にいた。爆風がきて新田頭の家に戻った。畑から家までは 7 分くらいかかる。家に帰ると爆風で戸が飛んでいた。家に帰ってから 10 分ほどしてザーザーと雨が降った。家に入らずに雨に濡れた。雨が降っていた時間は 20 分位。家族は自分と母、妹 2 人と姉の 6 人家族。翌日浦上に行った。盆過ぎに自分と母に軽度の脱毛あり。

### T. I. 男性 被爆時年齢 17 歳

ちょうど休暇で門前の実家に帰ってきていた。原爆投下時は母親と門前の水田で草取りをしていた。ピカッと光って土手にかがんだ。空からゴミが降ってきた。小雨が降って濡れた。そう長くは降らなかった。家族は父母と弟 4 人、妹 2 人の 9 人家族。自分は 3 日間、間の瀬にいて軍隊に帰った。盆過ぎに自分と当時 15 歳の妹に脱毛あり。つるつるにはならなかった。

### T. M 男性 被爆時年齢 9 歳

原爆が落ちたときは、八峰の家の庭にいた。両親と兄弟の 5 人家族。両親は近くの畑で農作業をしていた。原爆が落ちると、ドーンと音がして、紙くずや燃え滓が降ってきた。生後まもない妹（昭和 20 年 3 月生まれ）をかばって家にいれた。しばらくすると空が真っ黒になり、まるで日食のようだった。焼き場の灰のような黒い雨が降ってきて濡れた。1 週間ほどして下痢した。吐き気もあったように思う。9 月にはいって髪の毛がぬけた。程度はひどくなく、抜け毛が多い程度。両親は脱毛の程度は自分よりひどかった。原爆のあと市内にはいったせいもあるかもしれない。

**K. Y. 男性 被爆時年齢 5 歳**

原爆が落ちたときは、新田頭の家に行った。空が真っ黒になり、30分ほどしてから衣類の燃え滓や灰が箆のように降ってきた。それから夕立のような雨が降り、外に出てみると雨の色が黒かった。雨に打たれながら「なして雨の黒かとやろか？」と家人と話した記憶がある。雨が降ったのは10分～20分位。降り終わった後の地面は雨で濡れていた。家族は7人位。脱毛は認めなかったが、原爆の後、近所の赤ちゃんが亡くなった。

② 矢竹（やたけ） 古賀村

**Y. M. 女性 被爆時年齢 21 歳**

原爆が落ちたときは矢竹の田んぼ（間の瀬まで徒歩約10分）で親戚のもの3人で草取りをしていた。水面がピカッと光ったと思うと爆風がきた。その時、お腹に赤ちゃんがいたので（妊娠8ヶ月）、お腹をかばって伏せず、みんなで田んぼの岸にかがんだ。5分位そうしていると、通りがかりの人から「おまえたちや、息はついとつとなあ」と声をかけられた。間もなく雨がふってきた。その後に空からゴミがふってきて、稲の葉が真っ黒になった。家に帰ると玄関の扉が吹っ飛び、時計が落ち、畳の上に裁縫箱が散乱していた。

生活用水は井戸水。その後、脱毛等は認めていない。雨の降った田んぼの稲は育ち、その米を食べた。

③ 上床（うわとこ） 古賀村

**M. T 女性 被爆時年齢 17 歳**

近くの芋畑にいた。ピカって光り、どーんと音がして隠れた。キノコ雲が見えた。家に帰ったら障子や襖が吹き飛んでいて、ばあさんが一人で大掃除をしていた。ゴミや灰がいっぱい降ってきた。昼からまた畑に行った。ゴミや灰とともに雨が降ってきた。雨の色や時間は覚えていないが、当時を知る上床の人はみんな「黒か雨の降ったもんね」と言っていた。髪の毛はぬけなかった。

近くに溜め池があり、生活用水としていた。

④ 上座（じょうざ） 古賀村

**H. M. 男性 被爆時年齢 11 歳**（聞き取り+1987年8月2日 新聞赤旗 より抜粋）

登校日で国民学校にいた。先生が話しを始めたそのとき、刺すような白い光で空全体が光になって熱かった。その後生ぬるい爆風が襲い、下級生の小さな体がなぎ倒された。

もうここにはいけないと、下級生をつれて自宅に帰った。家にたどり着いたのは1時間ほどたってからだった。しばらくして煙が空を覆い、燃え滓や灰のようなものが降り注ぎ、ペターッ、ペターッと黒い泥のような、コールタールのような雨粒が顔にあたった。

その日の夕方から家族に発熱、血の混じった下痢があった。その後、脱毛はなかった。

## 平成23年長崎県保険医協会聞き取り調査

### ⑤ 牧島（まきしま） 戸石村

#### S. C. 女性 被爆時年齢 8 歳

庭の木に登って兄弟とセミをとって遊んでいた。網場と弁天の浜の方角（＝爆心地の方角）がピカッと光った。急いで木から下りて、幼い弟をおんぶし、妹の手をひいて、家にはいった。と、同時に爆風がきた。ばあちゃんは小屋まで飛ばされた。自分も飛ばされて大黒柱にぶつかった。

それから、空から灰が雪のように降ってきた。ゴミも降ってきた。灰やゴミは海面にも降って海面が灰色になった。海面に浮かぶ紙切れやお札を拾って遊んだ。当時は女子もパンツ一枚だった。海からあがると降ってきた灰が体中に付着した。そのうち雨が降ってきて、濡れ、体に黒いすじを残して流れた。それでまた海に入って体を洗った。雨が降ったのは午後から夕方のように思う。

その後、髪の毛はぬけなかった。他に特別な症状もなかった。

### ⑥ 香田（こうだ） 田結村

#### M. F. 男性 被爆時年齢 19 歳

被爆時は橋部隊に属し、香田の坂にいた。長崎市の方角が光り、続いてドドーンと地響きがした。しばらくすると黄色い土が降ってきて、昼食のおにぎりのうえにかかった。パラシュートが流れてくるのも見えた。別の部隊が高射砲で打ったが当らなかったようだ。黄色い土は灰色に変わり、裸の上半身に黒く付着した。そのうち同僚から指摘されて、上半身が雨に濡れているのがわかった。大きな雨ではなかった。静かな雨。帽子はかぶっていた。雨の持続時間は不明。夕方、完全武装で米軍の上陸に備え、戦闘態勢解除後、夜間行軍で喜々津小学校に移動した。

盆過ぎに頭が痒くなって、髪の毛がざくざく取れた。脱毛は3、4年続いた。

### ⑦ 西川内（にしこうち） 喜々津村

#### T. H. 女性 被爆時年齢 9 歳

家下の砂利道で姉妹と遊んでいた。ピカッと光った。4歳の妹が「ねえちゃん、熱かったね」と言ったのを覚えている。家にもどったが、ガラスが爆風でバリバリに割れて入れなかった。仕方なく道端の石の上に座っていると、松脂採りにいていた大人たちも集まってきて、一緒に座った。ぼた雪のような灰がいっぱい降ってきて、道につもった。だいぶたって砂利道がわからないくらいに灰がつもった頃、大粒の雨が降ってきた。袖なしの白いシャツをきていて、腕やシャツにポツポツと黒いシミができた。雨がふってきたので、10m 位はなれた馬小屋にはいった。そこにしばらくいた。外にでたとき雨はやんでいた。どれ位の時間、雨が降っていたかはよく覚えていない。井戸はなく、出水を使っていた。その後、髪の毛はぬけなかった。



**H. M. 女性 被爆時年齢 13 歳**

家の畑で草むしりをしていた。ピカッと光ったので、とっさに地面に伏せた。周りの子供達をつれて防空壕に入った。防空壕までには2～3分の距離。しばらくして（2～3時間後くらい）大粒の雨が降ってきた。防空壕から外を見ると、小学校に上がる前の子供（6歳くらい）が上半身裸で、雨の中、遊んでいた。灰が付着した体に雨が降ったので、裸の上半身がちょうど地図のよう汚れていた。子供は自分のお腹を指でなぞると絵がかけるので面白らしく、しばらくそうやって遊んでいた。

井戸はなく、出水をためて、それを生活用水としていた。出水をためる所に蓋はなく、灰が浮いていた。後日、田んぼにでて草取りとかした。2～3ヶ月ほどしてから髪がぬけはじめた。櫛で髪をすくと髪の毛がいっぱいついてきた。ひどい時には、お岩さんのように、ぼろっと抜けた。